
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 朝夕《あさゆう》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 釣台に野菊も見えぬ桐油 | 哉《かな》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「口 + 苔」、第4水準2-4-16]

—

ようやくの事でまた病院まで帰って来た。思い出すところで暑い朝夕《あさゆう》を送ったのももう三カ月の昔になる。その頃《ころ》は二階の廂《ひさし》から六尺に余るほどの長い葎簀《よしず》を日除《ひよけ》に差し出して、熱《ほて》りの強い縁側《えんがわ》を幾分《いくぶん》か暗くしてあった。その縁側に是公《ぜこう》から貰った楓《かえで》の盆栽《ぼんさい》と、時々人の見舞に持ってきてくれる草花などを置いて、退屈も凌《しの》ぎ暑さも紛《まぎ》らしていた。向《むこう》に見える高い宿屋の物干《ものほし》に真裸《まっぱだか》の男が二人出て、日盛《ひざかり》を事ともせず、欄干《らんかん》の上を危《あぶ》なく渡ったり、または細長い横木の上にわざと仰向《あおむけ》に寝たりして、ふざけまわる様子を見て自分もいつか一度はもう一遍あんな逞《たくま》しい体格になって見たいと羨《うらや》んだ事もあった。今はすべてが過去に化してしまった。再び眼の前に現れぬと云う不慥《ふたしか》な点において、夢と同じくはかない過去である。

病院を出る時の余は医師の勧めに従って転地する覚悟はあった。けれども、転地先で再度の病《やまい》に罹《かか》って、寝たまま東京へ戻って来《こ》ようとは思わなかった。東京へ戻ってもすぐ自分の家の門は潜《くぐ》らずに釣台《つりだい》に乗ったまま、また当時の病院に落ちつく運命になろうとはなおさら思いがけなかった。

帰る日は立つ修善寺《しゅぜんじ》も雨、着く東京も雨であった。扶《たす》けられて汽車を下りるときわざわざ出迎えてくれた人の顔は半分も眼に入《い》らなかった。目礼《もくれい》をする事のできたのはその中《うち》の二三に過ぎなかった。思うほどの会釈《えしゃく》もならないうちに余は早く釣台の上に横《よこた》えられていた。黄昏《たそがれ》の雨を防ぐために釣台には桐油《とうゆ》を掛けた。余は坑《あな》の底に寝かされたような心持で、時々暗い中で眼を開《あ》いた。鼻には桐油の臭がした。耳には桐油を撲《う》つ雨の音と、釣台に付添うて来るらしい人の声が微《かす》かながらとぎれとぎれに聞えた。けれども眼には何物も映らなかった。汽車の中で森成《もりなり》さんが枕元《まくらもと》の信玄袋《しんげんぶくろ》の口に挿《さ》し込んでくれた大きな野菊の枝は、降りる混雑の際に折れてしまったろう。

釣台に野菊も見えぬ桐油 | 哉《かな》

これはその時の光景を後から十七字にちぢめたものである。余はこの釣台に乗ったまま病院の二階へ昇《か》き上《あ》げられて、三カ月 | 前《ぜん》に親しんだ白いベッドの上に、安らかに瘠《や》せた手足を延べた。雨の音の多い静かな夜であった。余の病室のある棟《むね》には患者が三四名しかいないので、人声も自然絶え勝に、秋は修善寺よりもかえってひっそりしていた。

この静かな宵《よい》を心地《こち》よく白い毛布の中に二時間ほど送った時、余は看護婦から二通の電報を受取った。一通を開けて見ると「無事御帰京を祝す」と書いてあった。そうしてその差出人は満洲にいる中村是公《なかむらぜこう》であった。他の一通を開けて見ると、やはり無事御帰京を祝すと云う文句で、前のと一字の相違もなかった。余は平凡ながらこの暗合《あんごう》を面白く眺めつつ、誰が打ってくれたのだろうと考えて差出人の名前を見た。ところがステトとあるばかりでいっこうに要領を得なかった。ただかけた局が名古屋とあるのでようやく判断がついた。ステトと云うのは、鈴木禎次《すずきていじ》と鈴木時子《すずきときこ》の頭文字《かしらもじ》を組み合わせたもので、妻《さい》の妹《いもと》とその夫《おっと》の事であった。余は二つの電報を折り重ねて、明朝《あす》また来《きた》るべき妻の顔を見たら、まずこの話をしようかと思いい定めた。

病室は畳も青かった。襖《ふすま》も張《は》り易《か》えてあった。壁も新《あらた》に塗ったばかりであ

った。万《よろず》居心よく整っていた。杉本副院長が再度修善寺へ診察に来た時、畳替《たたみがえ》をして待っていますと妻に云い置かれた言葉をすぐに思い出したほど奇麗《きれい》である。その約束の日から指を折って勘定《かんじょう》して見ると、すでに十六七日目になる。青い畳もだいび久しく人を待ったらしい。

[#ここから2字下げ]

思いけりすでに幾夜《いくよ》の蟋蟀《きりぎりす》

[#ここで字下げ終わり]

その夜から余は当分またこの病院を第二の家とする事にした。

二

病院に帰り着いた十一日の晩、回診の後藤さんにこの頃院長の御病気はどうですかと聞いたら、ええひとしきりはだいび好い方でしたが、近来また少し寒くなったものですから……と云う答だったので、余はどうぞ御逢《おあ》いの節は宜《よろ》しくと挨拶《あいさつ》した。その晩はそれぎり何の気もつかずに寝てしまった。すると明日《あくるひ》の朝 | 妻《さい》が来て枕元に坐《すわ》るや否や、実はあなたに隠しておりましたが長与《ながよ》さんは先月《せんげつ》五日《いつか》に亡《な》くなりました。葬式には東《ひがし》さんに代理を頼みました。悪くなったのは八月末ちょうどあなたの危篤《きとく》だった時分ですと云う。余はこの時始めて附添《つきそい》のものが、院長の訃《ふ》をことさらに秘して、余に告げなかった事と、またその告げなかった意味とを悟った。そうして生き残る自分やら、死んだ院長やらをとかくに比較して、しばらくは茫然《ぼうぜん》としたまま黙っていた。

院長は今年の春から具合が悪かったので、この前《ぜん》入院した時にも六週間の間ついで顔を見合せた事がなかった。余の病気の由《よし》を聞いて、それは残念だ、自分が健康でさえあれば治療に尽力して上げるのにと云う言伝《ことづて》があった。その後《ご》も副院長を通じて、よろしくと云う言伝《ことづて》が時々あった。

修善寺《しゅぜんじ》で病気がぶり返して、社から見舞のため森成《もりなり》さんを特別に頼んでくれた時、着いた森成さんが、病院の都合上とても長くはと云っているその晩に、院長はわざわざ直接森成さんに電報を打って、できるだけ余の便宜を計《はか》らってくれた。その文句は寝ている余の目には無論触れなかった。けれども枕元にいる雪鳥君《せっちょうくん》から聞いたその文句の音《おん》だけは、いまだに好意の記憶として余の耳に残っている。それは当分その地に留《とど》まり、充分看護に心を尽くすべしとか云う、森成さんに取ってはずいぶん厳《おごそ》かに聞える命令的なものであった。

院長の容態《ようだい》が悪くなったのは余の危篤に陥《おちい》ったのとほぼ同時だそうである。余が鮮血を多量に吐《は》いて傍人《ぼうじん》からとうてい回復の見込がないように思われた二三日 | 後《あと》、森成さんが病院の用事だからと云って、ちょっと東京へ帰ったのは、生前に一度院長に会うため、それから十日ほど経《た》って、また病院の用事ができて二度東京へ戻ったのは院長の葬式に列するためであったそうである。

当初から余に好意を表して、間接に治療上の心配をしてくれた院長はかくのごとくしだいに死に近づきつつある間に、余は不思議にも命の幅《はば》の縮《ちぢ》まってほとんど絹糸のごとく細くなった上を、ようやく無難に通越した。院長の死が一基の墓標で永く確《たしか》められたとき、辛抱強く骨の上に絡《から》みついでいてくれた余の命の根は、辛《かる》うじて冷たい骨の周囲に、血の通う新しい細胞を営み初めた。院長の墓の前に供えられる花が、幾度《いくたび》か枯れ、幾度か代って、萩、桔梗《ききょう》、女郎花《おみなえし》から白菊と黄菊に秋を進んで来た一カ月 | 余《よ》の後《のち》、余はまたその一カ月余の間に盛返し得るほどの血潮を皮下に盛得《もりえ》て、再び院長の建てたこの胃腸病院に帰って来た。そうしてその間いまだかつて院長の死んだと云う事を知らなかった。帰る明《あく》る朝 | 妻《さい》が来て実はこれこれと話をするまで、院長は余の病気の経過を東京にいて承知しているものと信じていた。そうして回復の上病院を出たら礼にでも行こうと思っていた。もし病院で会えたら篤《あつ》く謝意でも述べようと思っていた。

逝《ゆ》く人に留《とど》まる人に来《きた》る雁《かり》

考えると余が無事に東京まで帰れたのは天幸《てんこう》である。こうなるのが当り前のように思うのは、いまだに生きているからの悪度胸《わるどきょう》に過ぎない。生き延びた自分だけを頭に置かずに、命の綱を踏《ふ》み外《はず》した人の有様も思い浮べて、幸福な自分と照らし合せて見ないと、わがありがたさも分らない、人の気の毒さも分らない。

[#ここから2字下げ]

ただ一羽 | 来《く》る夜ありけり月の雁《かり》

[#ここで字下げ終わり]

三

ジェームス教授の訃《ふ》に接したのは長与院長の死を耳にした明日《あくるひ》の朝である。新着の外国雑誌を手にして、五六頁《ページ》繰って行くうちに、ふと教授の名前が眼にとまったので、また新しい著書でも公《おおや》けにしたのか知らんと思いながら読んで見ると、意外にもそれが永眠《えいみん》の報道であった。その雑誌は九月初めのもので、項中には去る日曜日に六十九歳をもって逝《ゆ》かるとあるから、指を折って勘定《かんじょう》して見ると、ちょうど院長の容体《ようだい》がしだいに悪い方へ傾いて、傍《はた》のものが昼夜《ちゅうや》眉《まゆ》を顰《ひそ》めている頃である。また余が多量の血を一度に失って、死生《しせい》の境《さかい》に彷徨《ほうこう》していた頃である。思うに教授の呼息《いき》を引き取ったのは、おそらく余の命が、瘡《や》せこけた手頸《てくび》に、有るとも無いとも片付かない脈を打たして、看護の人をはらはらさせていた日であろう。

教授の最後の著書「多元的宇宙」を読み出したのは今年の夏の事である。修善寺《しゅぜんじ》へ立つとき、向《むこう》へ持って行って読み残した分を片付けようと思って、それを五六巻の書物とともに鞆《かばん》の中に入れた。ところが着いた明日《あくるひ》から心持が悪くて、出歩く事もならない始末になった。けれども宿の二階に寝転《ねころ》びながら、一日《いちにち》二日《ふつか》は少しずつでも前の続きを読む事ができた。無論病勢の募《つの》るに伴《つ》れて読書は全く廃《よ》さなければならなくなったので、教授の死ぬ日まで教授の書を再び手に取る機会はなかった。

病牀《びょうしょう》にありながら、三たび教授の多元的宇宙を取り上げたのは、教授が死んでから幾日目《いつかめ》になるだろう。今から顧みると当時の余は恐ろしく衰弱していた。仰向《あおむけ》に寝て、両方の肘《ひじ》を蒲団《ふとん》に支えて、あのくらの本を持ち応《こた》えているのにずいぶん骨が折れた。五分と経《た》たないうちに、貧血の結果手が麻痺《しび》れるので、持ち直して見たり、甲を撫《な》でて見たりした。けれども頭は比較的疲れていなかったと見えて、書いてある事は苦《く》もなく会得《えとく》ができた。頭だけはもう使えるなど云う自信の出たのは大吐血以後この時が始《はじめ》てであった。嬉《うれ》しいので、妻《さい》を呼んで、身体《からだ》の割に頭は丈夫なものだねと云って訳を話すと、妻がいったいあなたの頭は丈夫過ぎます。あの危篤《あぶな》かった二三日の間などは取り扱い悪《にく》くて大変弱らせられましたと答えた。

多元的宇宙は約半分ほど残っていたのを、三日ばかりで面白く読み了《おわ》った。ことに文学者たる自分の立場から見て、教授が何事によらず具体的事実を土台として、類推《アナロジー》で哲学の領分に切り込んで行く所を面白く読み了った。余はあながちに弁証法《ダイアレクチック》を嫌《きら》うものではない。また妄《みだ》りに理知主義《インテレクチュアリズム》を厭《いと》いもしない。ただ自分の平生文学上に抱いている意見と、教授の哲学について主張するところの考とが、親しい気脈を通じて彼此相倚《ひしあいよ》るような心持がしたのを愉快に思ったのである。ことに教授が仏蘭西《フランス》の学者ベルグソンの説を紹介する辺《あた》りを、坂に車を転がすような勢《いきおい》で馳《か》け抜けたのは、まだ血液の充分に通いもせぬ余の頭に取って、どのくらい嬉しかったか分らない。余が教授の文章にいたく推服したのはこの時である。

今でも覚えている。一間《ひとま》おいて隣にいる東君《ひがしくん》をわざわざ枕元へ呼んで、ジェームスは実に能文家《のうぶんか》だと教えるように云って聞かした。その時東君は別にこれという明瞭《めいりょう》な答をしなかったので、余は、君、西洋人の書物を読んで、この人のは流暢《りゅうちょう》だとか、あの人の細緻《さいち》だとか、すべて特色のあるところがその書きぶりで、読みながら解るかいと失敬な事を問い糺《ただ》した。

教授の兄弟にあたるヘンリーは、有名な小説家で、非常に難渋《なんじゅう》な文章を書く男である。ヘンリーは哲学のような小説を書き、ウィリアムは小説のような哲学を書く、と世間で云われているくらいヘンリーは読みづらく、またそのくらい教授は読みやすくて明快なのである。病中の日記を検《しら》べて見ると九月二十三日の部に、「午前ジェームスを読《よ》み了《おわ》る。好い本を読んだと思う」と覚束《おぼつか》ない文字《もんじ》で認《したた》めてある。名前や標題に欺《だま》されて下らない本を読んだ時ほど残念な事はない。この日記は正にこの裏を云ったものである。

余の病気について治療上いろいろ好意を表してくれた長与病院長《ながよびょういんちょう》は、余の知らない間にいつか死んでいた。余の病中に、空漠《くうばく》なる余の頭に陸離《りくり》の光彩を抛《な》げ込《こ》んでくれたジェームス教授も余の知らない間にいつか死んでいた。二人に謝すべき余はただ一人生き残っている。

菊の雨われに閑《かん》ある病《やまい》哉《かな》

菊の色 | 縁《えん》に末《いまだ》し此《この》晨《あした》

[# ここから3字下げ]

(ジェームス教授の哲学思想が、文学の方面より見て、どう面白いかにここに詳説する余地がないのは余の遺憾《いかな》とするところである。また教授の深く推賞したベルグソンの著書のうち第一巻は昨今ようやく英訳になってゾンネンシャインから出版された。その標題は Time and Free Will (時と自由意思) と名づけてある。著の立場は無論故教授と同じく反理知派である。)

[# ここで字下げ終わり]

病《やまい》の重かった時は、固《もと》よりその日その日に生きていた。そうしてその日その日によって行った。自分にもわが心の水のように流れ去る様がよく分った。自白すれば雲と同じくかつ去《さ》りかつ来《きた》るわが脳裡《のうり》の現象は、極《きわ》めて平凡なものであった。それも自覚していた。生涯《しょうがい》に一度か二度の大患に相応するほどの深さも厚さもない経験を、恥《はじ》とも思わず無邪気に重ねつつ移って行くうちに、それでも他日の参考に日ごとの心を日ごとに書いておく事ができたなと思い出した。その時の余は無論手が利《き》かなかった。しかも日は容易に暮れ容易に明けた。そうして余の頭を掠《かす》めて去《さ》る心の波紋《はもん》は、随《したが》って起《おこ》るかと思えば随《したが》って消えてしまった。余は薄ぼけて微《かす》かに遠きに行くわが記憶の影を眺めては、寝ながらそれを呼び返したいような心持がした。ミュンステルベルグと云う学者の家に賊が入った引合《ひきあい》で、他日彼が法庭《ほうてい》へ呼び出されたとき、彼の陳述はほとんど事実と相違する事ばかりであったと云う話がある。正確を旨《むね》とする几帳面《きちょうめん》な学者の記憶でも、記憶はこれほどに不慥《ふたしか》なものである。「思い出す事など」の中に思い出す事が、日を経《ふ》れば経るに従って色彩を失うのはもちろんである。

わが手の利《き》かぬ先にわが失えるものはすでに多い。わが手筆を持つ力を得てより逸《いっ》するものまた少からずと云っても嘘《うそ》にはならない。わが病気の経過と、病気の経過に伴《つ》れて起る内面の生活とを、不秩序ながら断片的にも叙しておきたいと思い立ったのはこれがためである。友人のうちには、もうそれほど好くなったかと喜んでくれたものもある。あるいはまたあんな軽挙《かるはずみ》をしてやり損《そこ》なわなければいいがと心配してくれたものもある。

その中で一番 | 苦《にが》い顔をしたのは池辺三山君《いけべさんざんくん》であった。余が原稿を書いたと聞かや否や、たちまち余計な事だと叱りつけた。しかもその声はもっとも無愛想《ぶあいそう》な声であった。医者 of 許可を得たのだから、普通の人の退屈凌《たいくつしの》ぎぐらいなところと見たらよかろうと余は弁解した。医者 of 許可もさる事だが、友人の許可を得なければいかんと云うのが三山君の挨拶《あいさつ》であった。それから二三日して三山君が宮本博士に会ってこの話をする、博士は、なるほど退屈をすると胃に酸《さん》が湧《わ》く恐れがあるからかえって悪いだろうと調停してくれたので、余はようやく助かった。

その時余は三山君に、

[# ここから 2 字下げ]

遣却新詩無処尋 [# 「遣却新詩無処尋」に白丸傍点]。 [# 「口 + 荅」、第4水準2-4-16] 然隔 [# 「片 (戸 + 甫)」、第3水準1-87-69] 对遥林 [# 「 [# 「口 + 荅」、第4水準2-4-16] 然隔 [# 「片 + (戸 + 甫)」、第3水準1-87-69] 对遥林」に白丸傍点]。

斜陽満径照僧遠 [# 「斜陽満径照僧遠」に白丸傍点]。 黄葉一村蔵寺深 [# 「黄葉一村蔵寺深」に白丸傍点]

。 懸偈壁間焚仏意 [# 「懸偈壁間焚仏意」に白丸傍点]。 見雲天上抱琴心 [# 「見雲天上抱琴心」に白丸傍点]

。 人間至楽江湖老 [# 「人間至楽江湖老」に白丸傍点]。 犬吠鶏鳴共好音 [# 「犬吠鶏鳴共好音」に白丸傍点]

[# ここで字下げ終わり]

と云う詩を遣《おく》った。巧拙《こうせつ》は論外として、病院にいる余が窓から寺を望む訳もなし、また室内に琴《こと》を置く必要もないから、この詩は全くの実況に反しているには違《ちがひ》ないが、ただ当時の余の心持を咏《えい》じたものとしてはすこぶる恰好《かつこう》である。宮本博士が退屈をすると酸《さん》がたまると云ったごとく、忙殺《ぼうさつ》されて酸が出過ぎる事も、余は親しく経験している。詮《せん》ずるところ、人間は閑適《かんてき》の境界《きょうがい》に立たなくては不幸だと思つたので、その閑適をしばらくなりとも貪《むさぼ》り得《う》る今の身の嬉しさが、この五十六字に形を変じたのである。

もっとも趣《おもむき》から云えばまことに旧《ふる》い趣である。何の奇もなく、何の新もないと云ってもよい。実際ゴルキーでも、アンドレーフでも、イブセンでもショウでもない。その代りこの趣は彼ら作家のいまだかつて知らざる興味に属している。また彼らのけっして与《あず》からざる境地に存している。現今《げんこん》の吾《われ》らが苦しい実生活に取り巻かれるごとく、現今の吾等が苦しい文学に取りつかれるのも、やむをえざる悲しき事実ではあるが、いわゆる「現代的気風」に煽《あお》られて、三百六十五日の間、傍目《わきめ》もふらず、しかく人世を觀《かん》じたら、人世は定めし窮屈でかつ殺風景なものだろう。たまにはこんな古風の趣がかえって一段の新意《しんい》を吾らの内面生活上に放射するかも知れない。余は病《やまい》に因《よ》ってこの陳腐《ちんぷ》な幸福と爛熟《らんじゅく》な寛裕《くつろぎ》を得て、初めて洋行から帰って平凡な米の飯に向つた時のような心持がした。

「思い出す事など」は忘れるから思い出すのである。ようやく生き残って東京に帰った余は、病に因って纔《わず》かに享《う》けたこの長閑《のどか》な心持を早くも失わんとしつつある。まだ床《とこ》を離れるほど

に足腰が利《き》かないうちに、三山君に遣った詩が、すでにこの太平の趣をうたうべき最後の作ではなかろうかと、自分ながら掛念《けねん》しているくらいである。「思い出す事など」は平凡で低調な個人の病中における述懐《じゅっかい》と叙事に過ぎないが、その中《うち》にはこの陳腐《ちんぷ》ながら払底《ふってい》な趣《おもむき》が、珍らしくだいぶ這入《はい》って来るつもりであるから、余は早く思い出して、早く書いて、そうして今の新しい人々と今の苦しい人々と共に、この古い香《かおり》を懐《なつ》かしみたいと思う。

五

修善寺《しゅぜんじ》にいたる間は仰向《あおむけ》に寝たままよく俳句を作っては、それを日記の中に記《つ》け込《こ》んだ。時々面倒な平仄《ひょうそく》を合わせて漢詩さえ作って見た。そうしてその漢詩も一つ残らず未定稿《みていこう》として日記の中に書きつけた。

余は年来俳句に疎《うと》くなりまさった者である。漢詩に至っては、ほとんど当初からの門外漢と云ってもいい。詩にせよ句にせよ、病中にでき上ったものが、病中の本人にはどれほど得意であっても、それが専門家の眼に整って（ことに現代的に整って）映るとは無論思わない。

けれども余が病中に作り得た俳句と漢詩の価値は、余自身から云うと、全くその出来不出来に関係しないのである。平生《へいぜい》はいかに心持の好くない時でも、いやしくも塵事《じんじ》に堪《た》え得るだけの健康をもっていると自信する以上、またもっていると人から認められる以上、われは常住日夜《じょうじゅうにちや》共に生存競争裏《せいぞんきょうそうり》に立つ悪戦の人である。仏語《ぶつご》で形容すれば絶えず火宅《かたく》の苦《く》を受けて、夢の中でさえいらいらしている。時には人から勧められる事もあり、たまには自《みづか》ら進む事もあって、ふと十七字を並べて見たりまたは起承転結《きしょうてんけつ》の四句ぐらい組み合わせないとも限らないけれどもいつもどこかに間隙《すき》があるような心持がして、隈《くま》も残さず心を引《ひ》き包《くる》んで、詩と句の中に放り込む事ができない。それは歡樂を嫉《ねた》む実生活の鬼の影が風流に纏《まつわ》るためかも知れず、または句に熱し詩に狂するのあまり、かえって句と詩に翻弄《ほんろう》されて、いらいらすまじき風流にいらいらする結果かも知れないが、それではいくら佳句《かく》と好詩《こうし》ができたにしても、羸《か》ち得《う》る当人の愉快はただ二三 | 同好《どうこう》の評判だけで、その評判を差し引くと、後《あと》に残るものは多量の不安と苦痛に過ぎない事に帰着してしまう。

ところが病気をするとだいぶ趣が違って来る。病気の時には自分が一步現実の世を離れた気になる。他《ひと》も自分を一步社会から遠ざかったように大目に見てくれる。こちらには一人前《いちにんまえ》働かなくてもすむという安心ができ、向うにも一人前として取り扱うのが気の毒だという遠慮がある。そうして健康の時にはとても望めない長閑《のど》かな春がその間から湧《わ》いて出る。この安らかな心がすなわちわが句、わが詩である。したがって、出来栄《できばえ》の如何《いかん》はまず措《お》いて、できたものを太平の記念と見る当人にはそれがどのくらい貴《とうと》いか分らない。病中に得た句と詩は、退屈を紛《まぎ》らすため、閑《かん》に強《し》いられた仕事ではない。実生活の圧迫を逃れたわが心が、本来の自由に跳《は》ね返って、むっちりとした余裕を得た時、油然《ゆうぜん》と漲《みな》ぎり浮かんだ天来《てんらい》の彩紋《さいもん》である。吾ともなく興の起るのがすでに嬉《うれ》しい、その興を捉《とら》えて横に咬《か》み豎《たて》に砕《くだ》いて、これを句なり詩なりに仕立上げる順序過程がまた嬉しい。ようやく成った暁には、形の無い趣《おもむき》を判然《はっきり》と眼の前に創造したような心持がしてさらに嬉しい。はたしてわが趣とわが形に真の価値があるかないかは顧みる違《いとま》さえない。

病中は知ると知らざるとを通じて四方の同情者から懇切な見舞《みまい》を受けた。衰弱の今の身ではその一々に一々の好意に背《そむ》かないほどに詳《くわ》しい礼状を出して、自分がつい死にもせず今日《こんにち》に至った経過を報ずる訳にも行かない。「思い出す事など」を牀上《しょうじょう》に書き始めたのは、これがためである。各々《めいめい》に向けて云い送るべきはずのところを、略して文芸欄《ぶんげいらん》の一隅にのみ載せて、余のごときものために時と心を使われたありがたい人々にわが近況を知らせるためである。

したがって「思い出す事など」の中に詩や俳句を挟《はさ》むのは、単に詩人俳人としての余の立場を見て貰うつもりではない。実を云うとその善悪などはむしろどうでも好《い》いとまで思っている。ただ当時の余はかくのごとき情調に支配されて生きていたという消息が、一瞥《いちべつ》の迅《と》きうちに、読者の胸に伝われば満足なのである。

秋の江《え》に打ち込む杭《くい》の響かな

これは生き返ってから約十日ばかりしてふとできた句である。澄み渡る秋の空、広き江、遠くよりする杭の響、この三つの事相《じそう》に相応したような情調が当時絶えずわが微《かす》かなる頭の中を徂徠《そらい》した事はいまだに覚えている。

秋の空 | 浅黄《あさぎ》に澄めり杉に斧《おの》

これも同じ心の耽《ふけ》りを他《ほか》の言葉で云い現したものである。

別るるや夢一筋《ゆめひとすじ》の天の川

何という意味かその時も知らず、今でも分らないが、あるいは仄《ほのか》に東洋城《とうようじょう》と別れる折の連想が夢のような頭の中に這回《はいまわ》って、恍惚《こうこつ》とでき上ったものではないかと思う。

当時の余は西洋の語にほとんど見当らぬ風流と云う趣をのみ愛していた。その風流のうちでもここに挙《あ》げた句に現れるような一種の趣だけをとくに愛していた。

秋風や唐紅《からくれない》の咽喉仏《のどぼとけ》
という句はむしろ実況であるが、何だか殺気があって含蓄《がんちく》が足りなくて、口に浮かんだ時からすでに変な心持がした。

[#ここから2字下げ]

風流人未死 [# 「風流人未死」に白丸傍点]。 病裡領清閑 [# 「病裡領清閑」に白丸傍点]。

日々山中事 [# 「日々山中事」に白丸傍点]。 朝々見碧山 [# 「朝々見碧山」に白丸傍点]。

[#ここで字下げ終わり]

詩《し》に圈点《けんてん》のないのは障子《しょうじ》に紙が貼《は》ってないような淋《さび》しい感じがするので、自分で丸を付けた。余のごとき平仄《ひょうそく》もよく弁《わきま》えず、韻脚《いんきゃく》もうろ覚えにしか覚えていないものが何を苦しんで、支那人にだけしか利目《ききめ》のない工夫《くふう》をあえてしたかと云うと、実は自分にも分らない。けれども（平仄 | 韻字《いんじ》はさておいて）、詩の趣《おもむき》は王朝以後の伝習で久しく日本化されて今日《こんにち》に至ったものだから、吾々くらの年輩の日本人の頭からは、容易にこれを奪い去る事ができない。余は平生事に追われて簡易な俳句すら作らない。詩となると億劫《おっくう》でなお手を下《くだ》さない。ただ斯様《かよう》に現実界を遠くに見て、杳《はるか》な心にすこしの蟠《わだかま》りのないときだけ、句も自然と湧《わ》き、詩も興に乗じて種々な形のもとに浮んでくる。そうして後《あと》から顧みると、それが自分の生涯《しょうがい》の中《うち》で一番幸福な時期なのである。風流を盛るべき器《うつわ》が、無作法《ぶさほう》な十七字と、佶屈《きくつ》な漢字以外に日本で発明されたいざ知らず、さもなければ、余はかかる時、かかる場合に臨んで、いつでもその無作法とその佶屈とを忍んで、風流を這裏《しゃり》に楽しんで悔いざるものである。そうして日本に他の恰好《かっこう》な詩形の無いのを憾《うら》みとはけっして思わないものである。

六

始めて読書欲の萌《きざ》した頃、東京の玄耳君《げんじくん》から小包で酔古堂剣掃《すいこうけんそう》と列仙伝《れつせんてん》を送ってくれた。この列仙伝は帙入《ちついり》の唐本《とうほん》で、少し手荒に取扱うと紙がぴりぴり破れそうに見えるほどの古い 古いと云うよりもむしろ汚ない 本であった。余は寝ながらこの汚ない本を取り上げて、その中にある仙人の挿画《さしえ》を一々 | 丁寧《ていねい》に見た。そうしてこれら仙人の髯《ひげ》の模様だの、頭の恰好《かっこう》だのを互に比較して楽しんだ。その時は画工《えかき》の筆癖から来る特色を忘れて、こう云う頭の平らな男でなければ仙人になる資格がないのだろうと思ったり、またこう云う疎《まばら》な髯を風に吹かせなければ仙人の群《むれ》に入《い》る事は覚束《おぼつか》ないのだろうと思ったりして、ひたすら彼等の容貌《ようぼう》に表われてくる共通な骨相を飽《あ》かず眺めた。本文も無論読んで見た。平生気の短かい時にはとても見出す事のできない悠長《ゆうちょう》な心をめでたく意識しながら読んで見た。 余は今の青年のうちに列仙伝を一枚でも読む勇氣と時間をもっているものは一人もあるまいと思う。年を取った余も実を云うとこの時始めて列仙伝と云う書物を開けたのである。

けれども惜しい事に本文は挿画ほど雅《が》に行かなかった。中には欲の塊《かたまり》が羽化《うか》したような俗な仙人もあった。それでも読んで行くうちには多少気に入ったのもできてきた。一番 | 無雑作《むぞうさ》でかつおかしいと思ったのは、何ぞと云うと、手の垢《あか》や鼻糞《はなくそ》を丸めて丸薬《がんやく》を作って、それを人にやる道楽のある仙人であったが、今ではその名を忘れてしまった。

しかし挿画《さしえ》よりも本文よりも余の注意を惹《ひ》いたのは巻末にある附録であった。これは手軽にいうと長寿法《ちょうじゅほう》とか養生訓《ようじょうくん》とか称するものを諸方から取り集めて来て、いっしょに並べたもののようになされた。もっとも仙に化するための注意であるから、普通の深呼吸だの冷水浴だのとは違って、すこぶる抽象的で、實際解るとも解らぬとも片のつかぬ文字であるが、病中の余にはそれが面白かったと見えて、その二三節をわざわざ日記の中に書き抜いている。日記を検《しら》べて見ると「静《せい》これを性《せい》となせば心 | 其中《そのうち》にあり、動《どう》これを心となせば性其中にあり、心 | 生《しょう》ずれば性 | 滅《めつ》し、心滅すれば性生ず」というようなむずかしい漢文が曲がりくねりに半頁《はんぺい》ばかりを埋《うず》めている。

その時の余は印氣《インキ》の切れた万年筆《まんねんふで》の端を撮《つま》んで、ペン先へ墨の通うように一二度 | 揮《ふ》るのがすこぶる苦痛であった。實際健康な人が片手で攄《かし》の六尺棒を振り廻すよりも辛《つら》いくらいであった。それほど衰弱の劇《はげ》しい時にですら、わざわざこんな道經《どうきょう》めいた文句を写す余裕が心にあったのは、今から考えても真《まこと》に愉快である。子供の時 | 聖堂《せい

どう》の図書館へ通って、徂徠《そらい》の [# 「くさかんむりノ（言＋爰）」、第3水準1-91-40] 園十筆《けんえんじっぴつ》をむやみに写し取った昔を、生涯《しょうがい》にただ一度繰り返し得たような心持が起って来る。昔の余の所作《しょさ》が単に写すという以外には全く無意味であったごとく、病後の余の所作もまたほとんど同様に無意味である。そうしてその無意味なところに、余は一種の価値を見出して喜んでゐる。長生《ながいき》の工夫《くふう》のための列仙伝が、長生もしかねまじきほど悠長《ゆうちょう》な心の下《もと》に、病後の余からかく気楽に取扱われたのは、余にとって全くの偶然であり、また再び来《きた》るまじき奇縁である。

仏蘭西《フランス》の老画家アルピニーはもう九十一二の高齡である。それでも人並《ひとなみ》の氣力はあると見えて、この間のスタジオには目醒《めざま》しい木炭画が十種ほど載っていた。国朝六家詩鈔《こくちょうりくかししょう》の初にある沈徳潜《しんとくせん》の序には、乾隆丁亥夏五《けんりゅうていがいご》長洲《ちょうしゅう》沈徳潜《しんとくせん》書《しょ》す時に年九十有五。とわざわざ断つてある。長生《ながいき》の結構な事は云うまでもない。長生をしてこの二人のように頭がたしかに使えるのはなおさらめでたい。不惑《ふわく》の齡《よわい》を越すと間もなく死のうとして、わずかに助かった余は、これからいつまで生きられるか固《もと》より分らない。思うに一日生きれば一日の結構で、二日生きれば二日の結構であろう。その上頭が使えたらなおありがたいと云わなければなるまい。ハイズンは世間から二 | 返《へん》も死んだと評判された。一度は弔詩《ちょうし》まで作ってもらった。それにもかかわらず彼は依然として生きていた。余も当時はある新聞から死んだと書かれたそうである。それでも実は死なずにいた。そうして列仙伝を読んで子供の時の無邪気な努力を繰り返し得るほどに生き延びた。それだけでも弱い余にとって是非常な幸福である。その頃ある知らない人から、先生死にたもう事なかれ、先生死にたもうことなかれと書いた見舞を受けた。余は列仙伝を読むべく生き延びた余を悦《よろこ》ぶと同時に、この同情ある青年のために生き延びた余を悦んだ。

七

ウォードの著わした社会学の標題には力学的《ダイナミック》という形容詞をわざわざ冠《かん》してあるが、これは普通の社会学でない、力学的に論じたのだという事を特に断つたものと思われる。ところがこの本のかつて魯西亜語《ロシアゴ》に翻訳された時、魯国《ろこく》の当局者は直《ただ》ちにその発売を禁止してしまった。著者は不審の念に打たれて、その理由を在魯《ざいろ》の友人に聞き合せた。すると友人から、自分にもよくは分らぬが、おそらく標題に力学的という字と社会学《ソシオロジー》という字があるので、当局者は一も二もなくダイナミイト及び社会主義に関係のある恐ろしい著述と速断して、この暴挙をあえてしたのであるという返事が来たそうである。

魯国の当局者ではないが、余もこの力学的という言葉には少からぬ注意を払った一人である。平生から一般の学者がこの一字に着眼しないで、あたかも動きの取れぬ死物のように、研究の材料を取り扱いながらかえって平氣でゐるのを、常に飽《あ》き足らず眺めていたのみならず、自分と親密の関係を有する文芸上の議論が、ことにこの弊《へい》に陥《おちい》りやすく、また陥りつつあるように見えるのを遺憾《いかん》と批判していたから、参考のため、一度は魯国当局者を恐れしめたというこの力学的社会学なるものを一読したいと思っていた。実は自分の恥《はじ》を白状するようではなはだきまりが悪いが、これはけっして新しい本ではない。製本の体裁《ていさい》からしてがすでにスペンサーの綜合哲学《そうごうてつがく》に類した古風なものである。けれどもまた恐ろしく分厚《ぶあつ》に書き上げた著作で、上下二巻を通じて千五百頁ほどある大冊子だから、四五日はおろか一週間かかってもし読みこなす事はでき悪《にく》い。それでやむをえず時機の来るまでと思って、本箱の中へしまっておいたのを、小説類に興味を失《しっ》したこの頃の読物としては適当だろうとふと考えついたので、それを宅《うち》から取り寄せてとうとう力学的《ダイナミック》に社会学《ソシオロジー》を病院で研究する事にした。

ところが読み出して見ると、恐ろしく玄関の広い前置の長い本であった。そうして肝心《かんじん》の社会学そのものになるとすこぶる不完全で、かつせつかくの頼みと思っているいわゆる力学的がはなはだ心細くなるほどに手荒に取扱われていた。今更ウォードの著述に批評を下《くだ》すのは余の目的でない、ただついでに云うだけではあるが、今に本当の力学的が出るだろう、今に高潮の力学的が出るだろうと、どこまでも著者を信用して、とうとう千五百頁の最後の一頁の最後の文字まで読み抜けて、そうして期待したほどのものがどこからも出て来なかった時には、ちょうどハレー彗星《すいせい》の尾で地球が包まれべき当日を、何の変化もなく無事に経過したほどあっけない心持がした。

けれども道中は、道草を食うべく余儀なくされるだけそれだけ多趣多様で面白かった。その中《うち》で宇宙創造論《コスモジェニー》と云う巖《いか》めしい標題を掲げた所へ来た時、余は覚えぬ昔《むか》し学校で先生から教わった星雲説《せいいうんせつ》の記憶を呼び起して微笑せざるを得なかった。そうしてふと考えた。

自分は今危険な病気からやっと回復しかけて、それを非常な仕合《しあわせ》のように喜んでゐる。そうして自分の癒《なお》りつつある間に、容赦なく死んで行く知名の人々や惜しい人々を今少し生かしておきたいとの

み翼《こいねが》っている。自分の介抱《かいほう》を受けた妻や医者や看護婦や若い人達をありがたく思っている。世話をしてくれた朋友《ほうゆう》やら、見舞に来てくれた誰彼《たれかれ》やらには篤《あつ》い感謝の念を抱いている。そうしてここに人間らしいあるものが潜《ひそ》んでいると信じている。その証拠《しょうこ》にはここに始めて生き甲斐《がい》のあると思われるほど深い強い快よい感じが漲《みなぎ》っているからである。

しかしこれは人間相互の関係である。よし吾々《われわれ》を宇宙の本位と見ないまでも、現在の吾々以外に頭を出して、世界のぐるりを見回さない時の内輪の沙汰《さた》である。三世《さんぜ》に亘《わた》る生物全体の進化論と、（ことに）物理の原則に因《よ》って無慈悲に運行し情義なく発展する太陽系の歴史を基礎として、その間に微《かす》かな生を営む人間を考えて見ると、吾らごときものの一喜一憂は無意味と云わんほどに勢力のないという事実に気がつかずにはいられない。

限りなき星霜《せいそう》を経て固《かた》まりかかった地球の皮が熱を得て溶解し、なお膨脹《ぼうちょう》して瓦斯《ガス》に変形すると同時に、他の天体もまたこれに等しき革命を受けて、今日《こんにち》まで分離して運行した軌道と軌道の間が隙間《すきま》なく充《み》たされた時、今の秩序ある太陽系は日月星辰《じつげつせいしん》の区別を失って、爛《らん》たる一大火雲のごとくに盤旋《ばんせん》するだろう。さらに想像を逆《さか》さまにして、この星雲が熱を失って収縮し、収縮すると共に回転し、回転しながらに外部の一片《いっぺん》を振りちぎりつつ進行するさまを思うと、海陸空気歴然と整えるわが地球の昔は、すべてこれ〔#「（諂・言）+炎」、第3水準1-87-64〕々《えんえん》たる一塊《いっかい》の瓦斯に過ぎないという結論になる。面目の髭鬚《ほうふつ》たる今日から溯《さかのぼ》って、科学の法則を、想像だも及ばざる昔に引張《ひっぱ》れば、一糸《いっし》も乱れぬ普遍の理で、山は山となり、水は水となったものには違かならうが、この山とこの水とこの空気と太陽の御蔭《おかげ》によって生息する吾《われ》ら人間の運命は、吾らが生くべき条件の備わる間の一瞬時　永劫《えいごう》に展開すべき宇宙歴史の長きより見たる一瞬時　を貪《むさ》ぼるに過ぎないのだから、はかないと云わんよりも、ほんの偶然の命と評した方が当たっているかも知れない。

平生の吾らはただ人を相手にのみ生きている。その生きるための空気については、あるのが当然だと思っていまだかつて心遣《こころづかい》さえした事がない。その心根《こころね》を糺《ただ》すと、吾らが生れる以上、空気は無ければならないはずだぐらいに観じているらしい。けれども、この空気があればこそ人間が生れるのだから、実を云えば、人間のためにできた空気ではなくて、空気のためにできた人間なのである。今にもあれこの空気の成分に多少の変化が起るならば、地球の歴史はすでにこの変化を予想しつつある　活潑《かっぱつ》なる酸素が地上の固形物と抱合《ほうごう》してしだいに減却するならば、炭素が植物に吸収せられて黒い石炭層に運び去らるるならば、月球《げっきゅう》の表面に瓦斯《ガス》のかからぬごとくに、吾らの世界もまた冷却し尽くすならば、吾らはことごとく死んでしまわねばならない。今の余のように生き延びた自分を祝い、遠く逝《ゆ》く他人を悲しみ、友を懷《なつか》しみ敵を悪《にく》んで、内輪だけの活計《かっけい》に甘んじて得意にその日を渡る訳には行くまい。

進んで無機有機を通じ、動植両界を貫《つらぬ》き、それらを万里一条の鉄のごとくに隙間《すきま》なく発展して来た進化の歴史と見倣《みな》すとき、そうして吾ら人類がこの大歴史中の単なる一頁《ページ》を埋《うず》むべき材料に過ぎぬ事を自覚するとき、百尺竿頭《ひゃくせきかんとう》に上《のぼ》りつめたと自任する人間の自惚《うぬぼれ》はまた急に脱落しなければならない。支那人が世界の地図を開いて、自分のいる所だけが中華でないと云う事を発見した時よりも、無気味な黒船が来て日本だけが神国でないと云う事を覚った時よりも、さらに溯《さかのぼ》っては天動説が打ち壊されて、地球が宇宙の中心でなかった事を無理に合点《がてん》せしめられた時よりも、進化論を知り、星雲説を想像する現代の吾らは辛《から》きジスイリュージョンを嘗《な》めている。

種類保存のためには個々の滅亡を意とせぬのが進化論の原則である。学者の例証するところによると、一頁《ページ》の大口魚《たら》が毎年生む子の数は百万疋とか聞く。牡蠣《かき》になるとそれが二百万の倍数に上《のぼ》るという。そのうちで生長するのはわずか数匹《すひき》に過ぎないのだから、自然は経済的に非常な濫費者《らんぴしゃ》であり、徳義上には恐るべく残酷な父母《ふぼ》である。人間の生死も人間を本位とする吾らから云えば大事件に相違ないが、しばらく立場を易《か》えて、自己が自然になり済ました気分で観察したら、ただ至当《しとう》の成行で、そこに喜びそこに悲しむ理窟《りくつ》は毫《ごう》も存在していないだろう。

こう考えた時、余ははなはだ心細くなった。またはなはだつまらなくなった。そこでことさらに気分を易えて、この間一頁《おおいそ》で亡《な》くなった大塚夫人の事を思い出しながら、夫人のために手向《たむけ》の句を作った。

〔#ここから2字下げ〕

有程の菊一抛《な》げ入れよ棺《かん》の中

〔#ここで字下げ終わり〕

忘るべからざる八月二十四日の来《きた》る二週間ほど前から余はすでに病んでいて。縁側《えんがわ》を絶えず通る湯治客に、吾姿を見せるのが苦《く》になって、蒸《む》し暑い時ですら障子《しょうじ》は常に閉《た》て切っていた。三度三度 | 献立《こんだて》を持って誂《あつらえ》を聞きにくる婆さんに、二品《ふたしな》三品《みしな》口に合いそうなものを注文はしても、膳《ぜん》の上に揃《そろ》った皿を眺めると共に、どこからともなく反感が起って、箸《はし》を執《と》る気にはまるでなれなかった。そのうちに嘔気《はきけ》が来た。

始めは煎薬《せんやく》に似た黄黒《きぐろ》い水をしたたかに吐いた。吐いた後《あと》は多少気分が癒《なお》るので、いささかの物は咽喉《のど》を越した。しかし越した嬉《うれ》しさがまだ消えないうちに、またそのいささかの胃の滞《とどこ》うる重き苦しみに堪《た》え切れなくなって来た。そうしてまた吐いた。吐くものは大概水である。その色がだんだん変って、しまいには緑青《ろくしょう》のような美しい液体になった。しかも一粒《いちりゅう》の飯さえあえて胃に送り得ぬ恐怖と用心の下《もと》に、卒然として容赦なく食道を逆《さか》さまに流れ出た。

青いものがまた色を変えた。始めて熊《くま》の胆《い》を水に溶き込んだように黒ずんだ濃い汁を、金盃《かなだらい》になみなみと反《もど》した時、医者は眉《まゆ》を寄せて、こういうものが出るようでは、今のうち安静にして東京に帰った方が好くろうと注告した。余は金盃の中を指《ゆびさ》していったい何が出るのかと質問した。医者は興《きょう》のない顔つきで、これは血だと答えた。けれども余の眼にはこの黒いものが血とは思えなかった。するとまた吐いた。その時は熊の胆の色が少し紅《くれない》を含んで、咽喉を出る時 | 腥《なまぐさ》い臭《かおり》がぷんと鼻を衝《つ》いたので、余は胸を抑えながら自分で血だ血だと云った。玄耳君《げんじくん》が驚ろいて森成《もりなり》さんに坂元《さかもと》君を添えてわざわざ修善寺《しゅぜんじ》まで寄こしてくれたのは、この報知が長距離電話で胃腸病院へ伝《つたわ》って、そこからまた直《すぐ》に社へ通じたからである。別館から馳《か》けて来た東洋城《とうようじょう》が枕辺《まくらべ》に立って、今日東京から医者と社員が来るはずになったと知らしてくれた時は全く救われたような気がした。

この時の余はほとんど人間らしい複雑な命を有して生きてはいなかった。苦痛のほかは何事をも容《い》れ得《え》ぬほどに烈《はげ》しく活動する胸を懷《いだ》いて朝夕《あさゆう》悩んでいたのである。四十年來の経験を刻んでなお余りあると見えた余の頭脳は、ただこの截然《せつぜん》たる一苦痛を秒ごとに深く印《いん》し来《く》るばかりを能事とするように思われた。したがって余の意識の内容はただ一色《ひといろ》の悶《もだえ》に塗抹《とまつ》されて、臍上方《さいじょうほう》三寸《さんずん》の辺《あたり》を日夜にうねうね行きつ戻りつするのみであった。余は明け暮れ自分の身体《からだ》の中《うち》で、この部分だけを早く切り取って犬に投げてやりたい気がした。それでなければこの恐ろしい単調な意識を、一刻も早くどこへか打ちやってしまいたい気がした。またできるならば、このまま睡魔に冒《おか》されて、前後も知らず一週間ほど寝込んで、しかる後 | 鷹揚《おうよう》な心持をゆたかに抱いて、爽《さわや》かな秋の日の光りに、両の眼を颯《さっ》と開《あ》けたかった。少くとも汽車に揺られもせず車に乗せられもせず、すうと東京へ帰って、胃腸病院の一室に這入《はい》って、そこに仰向《あおむ》けに倒れていたかった。

森成さんが来てもこの苦しみはちょっと除《と》れなかった。胸の中を棒で攪《か》き混《ま》ぜられるような、また胃の腑《ふ》が不規則な大波をその全面に向って層々と描き出すような、異《い》な心持に堪《た》えかねて、床《とこ》の上に起き返りながら、吐いて見ましようかと云って、腥《なまぐさ》いものを面《ま》のあたり咽喉《のど》の奥から金盃《かなだらい》の中に傾けた事もあった。森成さんの御蔭《おかげ》でこの苦しみがだいぶ退《ひ》いた時ですら、動くたびに腥い噫《おくび》は常に鼻を貫《つら》ぬいた。血は絶えず腸に向って流れていたのである。

この煩悶《はんもん》に比《くら》べると、忘るべからざる二十四日の出来事以後に生きた余は、いかに安住の地を得て静穩に生を営んだか分らない。その静穩の日がすなわち余の一生涯《いっしょうがい》にあって最も恐るべき危険の日であったのだと云う事を後から知った時、余は下《しも》のような詩を作った。

[# ここから2字下げ]

円覚曾参棒喝禅 [# 「円覚曾参棒喝禅」に白丸傍点]。 瞎児何処触機縁 [# 「瞎児何処触機縁」に白丸傍点]

。

青山不拒庸人骨 [# 「青山不拒庸人骨」に白丸傍点]。 回首九原月在天 [# 「回首九原月在天」に白丸傍点]

。

[# ここで字下げ終わり]

九

忘るべからざる二十四日の出来事を書こうと思って、原稿紙に向いかけると、何だか急に気が進まなくなったのでまた記憶を逆《さかさ》まに向け直して、後戻《あともど》りをした。

東京を立つときから余は劇《はげ》しく咽喉を痛めていた。いっしょに来るべきはずでつい乗り後《おく》れ

た東洋城《とうようじょう》の電報を汽車中で受け取って、その意のごとくに御殿場《ごてんば》で一時間ほど待ち合せていた間《ま》に、余は不用になった一枚の切符代を割り戻して貰うために、駅長室へ這入《はい》って行った。するとそこに腰囲何尺《よういなんじゃく》とでも形容すべきほど大きな西洋人が、椅子《いす》に腰をかけてしきりに絵端書《えはがき》の表に何か認《したた》めていた。余は駅長に向って当用を弁ずる傍《かたわら》、思いがけない所に思いがけない人がいるものだという好奇心を禁じ得なかった。するとその大男が突然立ち上がって、あなたは英語を話すかと聞くから、噀《か》れた声でわずかにイエスと答えた。男は次にこれから京都へ行くにはどの汽車へ乗ったら好いか教えてくれと云った。はなはだ簡単な用向《ようむき》であるから平生ならばどうとも挨拶《あいさつ》ができるのだけれども、声量を全く失っていた当時の余には、それが非常の困難であった。固《もと》より云う事はあるのだから、何か云おうとするのだが、その云おうとする言葉が咽喉《のど》を通るとき千条《ちすじ》に擦《す》り切《き》れでもするごとくに、口へ出て来る時分には全く光沢《つや》を失ってほとんど用をなさなかった。余は英語に通ずる駅員の助《たすけ》を藉《か》りて、ようやくのことこの大男を無事に京都へ送り届けた事と思うが、その時の不愉快はいまだに忘れない。

修善寺《しゅぜんじ》に着いてからも咽喉《のど》はいっこう好くならなかった。医者から薬を貰ったり、東洋城の拵《こしら》えてくれた手製の含漱《がんそう》を用いたりなどして、辛《から》く日常の用を弁ずるだけの言葉を使ってすましていた。その頃修善寺には北白川《きたしらかわ》の宮《みや》がおいでになっていた。東洋城は始終《しじゅう》そちらの方の務《つとめ》に追われて、つい一丁ほどしか隔っていない菊屋の別館からも、容易に余の宿までは来る事ができない様子であった。すべてを片づけてから、夜の十時過になって、始めて蚊 [# 「巾+厨」、第4水準2-8-91] 《かや》の外まで来て、一言《ひとこと》見舞を云うのが常であっ

。そういう夜《よ》の事であったか、または昼の話であったか今は忘れたが、ある時いつものように顔を合わせると、東洋城が突然、殿下からあなたに何か講話をして貰いたいという御注文があったと云い出した。この思いがけない御所望《ごしょもう》を耳にした余は少からず驚いた。けれども自分でさえ聞かずにすめば、聞かずにいたいような不愉快な声を出して、殿下に御話などをする勇氣はとても出なかった。その上 | 羽織《はおり》も袴《はかま》も持ち合せなかった。そうして余のごとき位階のないものが、妄《みだ》りに貴《たっと》い殿下の前に出てしかるべきであるかないかそれが第一分らなかった。実際は東洋城も独断で先例のない事をあえてするのを憚《はばか》って、確《しか》とした御受はしなかったのだそうである。

余の苦痛が咽喉から胃に移る間もなく、東洋城は故郷《ふるさと》にある母の病《やまい》を見舞うべく、去る人と入れ代ってひとまず東京に帰った。殿下もそれからほどなく御立《おたち》になった。そうして忘るべからざる二十四日の来た頃、東洋城は余に関する何の消息も知らずに、また東海道を汽車で西へ下って行った。その時彼は四五分の停車時間を偷《ぬす》んで、三島から余にわざわざ一通の手紙を書いた。その手紙は途中で紛失してしまって、つい宿へ着かなかったけれども、東洋城が御暇乞《おいとまごい》に上がった時、余の病気の事を御忘れにならなかった殿下から、もし逢《あ》う機会があったなら、どうか大事にするようにというような篤《あつ》い意味の御言葉を承ったため、それをわざわざ病中の余に知らせたのだそうである。咽喉の病も癒《い》え、胃の苦しみも去った今の余は、謹《つつし》んで殿下に御礼を申し上げなければならない。また殿下の健康を祈らなければならない。

十

雨がしきりに降った。裏山の絶壁を真逆《まさか》に下《くだ》る筈《かけい》の竹が、青く冷たく光って見えた幾日を、物憂《ものう》く室《へや》の中に呻吟《しんぎん》しつつ暮していた。人が寝静《ねしず》まると始めて夢を襲《おそ》う(欄干《らんかん》から六尺余りの所を流れる)水の音も、風と雨に打ち消されて全く聞えなくなった。そのうち水が出るとか出たとか云う声がどこからともなく耳に響いた。

お仙《せん》と云う下女が来て、昨夕《ゆうべ》桂川《かつらがわ》の水が増したので門の前の小家《こいえ》ではおおかたの荷を拵《こしら》えて、預けに来たという話をした。ついでにどこかでは家がまるで流されてしまって、そうしてその家の宝物がどこかから掘り出されたと云う話もした。この下女は伊東の生れで、浜辺か畑中に立って人を呼ぶような大きな声を出す癖のあるすこぶる殺風景な女であったが、雨に鎖《とど》された山の中の宿屋で、こういう昔の物語めいた、嘘《うそ》か真《まこと》か分らないことを聞かされたときは、御伽噺《おとぎばなし》でも読んだ子供の時のような気がして、何となく古めかしい香《におい》に包まれた。その上家が流されたのがどこで、宝物を掘出したのがどこか、まるで不明なのをいっこう構わずに、それが当然であるごとくに話して行く様子が、いかにも自分の今いる温泉《ゆ》の宿を、浮世から遠くへ離隔《りかく》して、どんな便《たよ》りも噂《うわさ》のほかには這入《はい》ってこれない山里に変化してしまったところに一種の面白味があった。

とかくするうちにこの楽《たのし》い空想が、不便な事実となって現れ始めた。東京から来る郵便も新聞もことごとく後《おく》れ出した。たまたま着くものは墨がにじむほどびしょびしょに濡《ぬ》れていた。湿った頁《ページ》を破けないように開けて見て、始めて都には今 | 洪水《こうずい》が出盛《でさか》っているという

報道を、鮮《あざ》やかな活字の上にまのあたり見たのは、何日《いつか》の事であったか、今たしかには覚えていないけれども、不安な未来を眼先に控《ひか》えて、その日その日の出来栄《できばえ》を案じながら病む身には、けっして嬉《うれ》しい便りではなかった。夜中に胃の痛みで自然と眼が覚《さ》めて、身体《からだ》の置所がないほど苦《くるし》い時には、東京と自分とを繋《つな》ぐ交通の縁が当分切れたその頃の状態を、多少心細いものに観じない訳に行かなかった。余の病気は帰るには余り劇《はげ》し過ぎた。そうして東京の方から余のいる所まで来るには、道路があまり打壊《うちこわ》れ過ぎた。のみならず東京その物がすでに水に浸《つか》っていた。余はほとんど崖《がけ》と共に崩《くず》れる吾家《わがや》の光景と、茅《ち》が崎《さき》で海に押し流されつつある吾子供らを、夢に見ようとした。雨のしたたか降る前に余は妻《さい》に宛てて手紙を出しておいた。それには好い部屋がないから四五日したら帰ると書いた。また病気が再発して苦《くるし》んでいると云う事はわざと知らせずにおいた。そうしてその手紙も着いたか着かないか分からないくらいに考えて寝ていた。

そこへ電報が来た。それは恐るべき長い時間と労力を費《ついや》して、やっとの事無事に宛名《あてな》の人に通ずるや否や、その宛名の人をして封を切らぬ先に少しはと思わせた電報であった。しかし中は、今度の水害でこちらは無事だが、そちらはどうかという、見舞と平信《へいしん》をかねたものに過ぎなかった。出した局の名が本郷とあるのを見てこれは草平君《そうへいくん》を煩《わずら》わしたものと知った。

雨はますます降り続いた。余の病気はしだいに悪い方へ傾《かたぶ》いて行った。その時、余は夜の十二時頃長距離電話をかけられて、硬《かた》い胸を抑えながら受信器を耳に着けた。茅ヶ崎の子供も無事、東京の家も無事という事だけが微《かす》かに分った。しかしその他は全く不得要領で、ほとんど風と話をするごとくに纏《まと》まらない雑音がぼうぼうと鼓膜に響くのみであった。第一かけた当人がわが妻《さい》であるという事さえ覚《さと》らずにこちらからあなたという敬語を何遍か繰返したくらい漠然《ぼんやり》した電話であった。東京の音信《たより》が雨と風と洪水の中に、悩んでいる余の眼に始めて瞭然と映ったのは、坐る暇もないほど忙《いそが》しい思いをした妻が、当時の事情をありのままに認《したた》めた巨細《こさい》の手紙がようやく余の手に落ちた時の事であった。余はその手紙を見て自分の病《やまい》を忘れるほど驚いた。

[#ここから2字下げ]

病んで夢む天の川より出水《でみず》かな

[#ここで字下げ終わり]

十一

妻《さい》の手紙は全部の引用を許さぬほど長いものであった。冒頭に東洋城から余の病気の報知を受けた由と、それがため少からず心を悩ましている旨《むね》を記して、看病に行きたいにも汽車が不通で仕方がないから、せめて電話だけでもと思って、その日の中には通じかねるところを、無理な至急報にして貰《もら》って、夜半《やはん》に山田の奥さんの所からかけたという説明が書いてあった。茅《ち》ヶ崎《さき》にいる子供の安否についても一方《ひとかた》ならぬ心配をしたものらしかった。十間坂下《じっけんざかした》という所は水害の恐れがないけれども、もし万一の事があれば、郵便局から電報で宅まで知らせて貰うはずになっていると、余に安心させるため、わざわざ断ってあった。そのほか市中たいていの平地《ひらち》は水害を受けて、現に江戸川通などは矢来《やらい》の交番の少し下まで浸《つか》ったため、舟に乗って往来《ゆきき》をしているという報知も書き込んであった。しかしその頃は後《おく》れながらも新聞が着いたから、一般の模様は妻の便りがなくてもほぼ分っていた。余の心を動かすべき現象は漠然《ぼくぜん》たる大社会の雨や水やと戦う有様にあると云うよりも、むしろ己《おのれ》だけに密接の関係ある個人の消息にあった。そうしてその個人の二人までに、この雨と水が命の間際《まぎわ》まで祟《たた》った顛末《てんまつ》を、余はこの書面の中《うち》に見出したのである。

一つは横浜に嫁《とつ》いだ妻の妹の運命に関した報知であった。手紙にはこう書いてある。

「.....梅子事 | 末《すえ》の弟を伴《つ》れて塔《とう》の沢《さわ》の福住《ふくずみ》へ参り居り候《そうろう》処、水害のため福住は浪《なみ》に押し流され、浴客《よくかく》六十名のうち十五名 | 行方不明《ゆくえふめい》との事にて、生死の程も分らず、如何《いかに》とも致し方なく、横浜へは汽車不通にて参る事 | 叶《かな》わず、電話は申込者多数にて一日を待たねば通じ不申《もうさず》.....」

後《あと》には、いろいろ込み入った工面《くめん》をして電話をかけた手続が書いてあって、その末に会社の小使とかが徒歩で箱根まで探しに行ったあげく、幽霊のように哀《あわ》れな姿をした彼女《かのおんな》を伴れて戻った模様が述べてあった。余はそこまで読んで来て、つい二三日前宿の下女から、ある所で水が出て家が流されて、その家の宝物がまたある所から掘り出されたという昔話のような物語を聞きながら、その裏には自分と利害の糸を絡《から》み合《あわ》せなければならぬ恐ろしい事実が潜《ひそ》んでいるとも気がつかずに、尾頭《おかしら》もない夢とのみ打ち興じてすましていた自分の無智に驚いた。またその無智を人間に強《し》いる運命の威力を恐れた。

もう一つ余の心を躍《おど》らしたのは、草平君に関する報知《しらせ》であった。妻《さい》が本郷の親類

で用を足した帰りとかに、水見舞のつもりで柳町《やなぎちょう》の低い町から草平君の住んでいる通りまで来て、ここらだがと思いながら、表から奥を覗《のぞ》いて見ると、かねて見覚《みおぼえ》のある家がくしゃりと潰《つぶ》れていたそうである。

「家《うち》の人達は無事ですか、どこへ行きましたかと聞いたら、薪屋《まきや》の御上《おかみ》さんが、昨晚の十二時頃に崖《がけ》が崩《くず》れましたが、幸いにどなたも御怪我《おけが》はございません。ひとまず柳町のこういう所へ御引移りになりましたと、教えてくれましたから、柳町へ来て見ると、まだ水の引き切らない床下《ゆかした》のぴたぴたに濡《ぬ》れた貸家に畳建具《たたみたてぐ》も何も入れずに、荷物だけ運んでありました。実に何と云って好いか憐《あわ》れな姿でお種《たね》さんが、私《わたし》の顔を見ると馳《か》け出して来ました。……晩の御飯を拵《こしら》える事もできないだろうと思って、御寿司《おすし》を誂《あつら》えて御夕飯の代りに上げました……」

草平君は平生《ふだん》から崖崩れを恐れて、できるだけ表へ寄って寝るとか聞いていたが、家の潰《つぶ》れた時には、外《ほか》のものがまるで無難であったにもかかわらず、自分だけは少し顔へ怪我《けが》をしたそうである。その怪我の事も手紙の中《うち》に書いてあった。余はそれを読んで怪我だけでまず仕合せだと思った。

家を流し崖を崩す凄《すさ》まじい雨と水の中に都のものは幾万となく恐るべき叫び声を揚《あ》げた。同じ雨と同じ水の中に余と関係の深い二人は身をもって免《まぬか》れた。そうして余は毫《ごう》も二人の災難を知らずに、遠い温泉《でゆ》の村に雲と煙《けぶり》と、雨の糸を眺め暮していた。そうして二人の安全であるという報知《しらせ》が着いたときは、余の病《やまい》がしだいしだいに危険の方へ進んで行った時であった。

[#ここから2字下げ]

風に聞け何《いず》れか先に散る木《こ》の葉《は》

[#ここで字下げ終わり]

十二

つづく雨の或《あ》る宵《よい》に、すこし病《やまい》の閑《ひま》を偷《ぬす》んで、下の風呂場へ降りて見ると、半切《はんきれ》を三尺ばかりの長《ながさ》に切って、それを細長く豎《たて》に貼《は》りつけた壁の色が、暗く映る灯《ひ》の陰に、ふと余の視線を惹《ひ》いた。余は湯壺《ゆつぼ》の傍《わき》に立ちながら、身体《からだ》を濡《し》めす前に、まずこの異様の広告めいたものを読む気になった。真中に素人《しろうと》落語大会と書いて、その下に催主《さいしゅ》裸連《はだかれん》と記してある。場所は「山荘にて」と断って、催《もよお》しのあるべき日取をその傍に書き添えた。余はすぐ裸連の何人《なんびと》なるかを覚《さと》り得た。裸連とは余の隣座敷にいる泊り客の自撰にかかる異名《いみょう》である。昨日《きのう》の午《ひる》襖越《ふすまごし》に聞いていると、太郎冠者《たろうかじゃ》がどうのこうのと長い評議の末、そこんところでやるまいぞ、やるまいぞにしたら好いじゃねえかと云うような相談があった。その趣向《しゅこう》は寝ている余とは固《もと》より無関係だから、知ろうはずもなかったが、とにかくこの議決が山荘での催《もよお》しに一異彩を加えた事はたしかに違いないと思った。余は風呂場の貼紙《はりがみ》に注意してある日付と、裸連《はだかれん》の趣向を凝《こ》らしていた時刻を照らし合せつつ、この落語会なるものの、すでに滞《とどこお》りなくすんだ昨日の午後を顧みて、裸連　　少くとも裸連の首脳の構成《かたちづく》る隣座敷の泊り客……の成功を祝せざるを得なかった。

この泊り客は五人連《ごにんづれ》で一間《ひとま》に這入《はい》っていた。その中《うち》の一番 | 年嵩《としかさ》に見える三十代の男に、その妻君と娘を合せるとすでに三人になる。妻君は品《ひん》のいい静かな女であった。子供はなおさらおとなしかった。その代り夫はすこぶる騒々しかった。あとの二人はいずれも二十代の青年で、その一人は一行のうちでもっともやかましくふるまっていた。

誰でも中年以後になって、二十一二時代の自分を眼の前に憶《おも》い浮べて見ると、いろいろ回想の簇《むら》がる中に、気恥《きはず》かしくて冷汗の流れそうな一断面を見出すものである。余は隣の室《へや》に呻吟《しんぎん》しながら、この若い男の言葉使いや起居《たちい》を注意すべく余儀なくされた結果として、二十年の昔に経過した、自分の生涯《しょうがい》のうちで、はなはだ不面目と思わざるを得ない生意気さ加減を今更のように恐れた。

この男は何の必要があってか知らないけれども、絶えず大道《だいどう》で講演でもするように大きな声を出して得意であった。そうして下女が来ると、必ず通客《つうかく》めいた粋《いき》がりを連発した。それを隣座敷《となりざしき》で聞いていると、ウィットにもならなければヒューモーにもなっていないのだから、いかにも無理やりに、（しかも大得意に、）半可《はんか》もしくは四半可《しはんか》を殺風景に怒鳴《どな》りつけているとしか思われなかった。ところが下女の方では、またそれを聞くたびに不必要にふんだんな笑い方をした。本気とも御世辞《おせじ》とも片のつかない笑い方だけれども、声帯に異状のあるような恐ろしい笑い方をした。病気にのみ屈託《くつたく》する余も、これには少からず悩まされた。

裸連の一部は下座敷にもいた。すべてで九人いるので、自《みづか》ら九人組とも称《とな》えていた。その九人組が丸裸になって幅六尺の縁側《えんがわ》へ出て踊をおどって一晚|跳《は》ね廻った。便所へ行く必要があって、障子《しょうじ》の外へ出たら、九人組は躍《おど》り草臥《くたび》れて、素裸《すはだか》のまま縁側に胡坐《あぐら》をかいていた。余は邪魔になる尻《しり》や脛《すね》の間を跨《また》いで用を足して来た。

長い雨がようやく歇《や》んで、東京への汽車がほぼ通ずるようになった頃、裸連は九人とも申し合せたように、どっと東京へ引き上げた。それと入れ代りに、森成さんと雪鳥君《せっちょうくん》と妻《さい》とが前後して東京から来てくれた。そうして裸連のいた部屋を借り切った。その次の部屋もまた借り切った。しまいには新築の二階座敷を四間《よま》ともに吾有《わがゆう》とした。余は比較的閑寂な月日の下《もと》に、吸飲《すいのみ》から牛乳を飲んで生きていた。一度は匙《さじ》で突き碎《くだ》いた水瓜《すいか》の底から湧《わ》いて出る赤い汁を飲まして貰《もら》った。弘法様《こうぼうさま》で花火の揚《あが》った宵《よい》は、縁近く寢床を摺《ず》らして、横になったまま、初秋《はつあき》の天《そら》を夜半近《やはんぢか》くまで見守っていた。そうして忘るべからざる二十四日の来るのを無意識に待っていた。

[#ここから2字下げ]

萩《はぎ》に置く露の重きに病む身かな

[#ここで字下げ終わり]

十三

その日は東京から杉本さんが診察に来る手筈《てはず》になっていた。雪鳥君が大仁《おおひと》まで迎《むかえ》に出たのは何時頃か覚えていないが、山の中を照らす日がまだ山の下に隠れない午過《ひるすぎ》であったと思う。その山の中を照らす日を、床を離れる事のできない、また室《へや》を出る事の叶《かな》わない余は、朝から晩までほとんど仰ぎ見た試しがないのだから、こう云うのも実は廂《ひさし》の先に余る空の端《はし》だけを目当《めあて》に想像した刻限《こくげん》である。余は修善寺《しゅぜんじ》に二月《ふたつき》と五日《いつか》ほど滞在しながら、どちらが東で、どちらが西か、どれが伊東へ越す山で、どれが下田へ出る街道か、まるで知らずに帰ったのである。

杉本さんは予定のごとく宿へ着いた。余はその少し前に、妻《さい》の手から吸飲《すいのみ》を受け取って、細長い硝子《ガラス》の口から生温《なまぬる》い牛乳を一合ほど飲んだ。血が出てから、安静状態と流動食事とは固く守らなければならない掟《おきて》のようになっていたからである。その上できるだけ病人に營養を与えて、体力の回復の方から、潰瘍《かいよう》の出血を抑えつけるという療治法を受けつつあった際だから、否応《いやおう》なしに飲んだ。実を云うとこの日は朝から食慾が萌《きざ》さなかったので、吸飲の中に、動く事のできぬほど濁った白い色の漲《みな》ぎる様を見せられた時は、すぐと重苦しく舌の先に溜《たま》るしつ濃《こ》い乳の味を予想して、手に取らない前からすでに反感を起した。強いられた時、余はやむなく細長く反《そ》り返《かえ》った硝子の管《くだ》を傾けて、湯とも水とも捌《さば》けない液《しる》を、舌の上にに《すべ》らせようと試みた。それが流れて咽喉《のど》を下《くだ》る後《あと》には、潔《いさぎ》よからぬ粘《ねば》り強い香《か》が妄《みだ》りに残った。半分は口直しのつもりであとから氷《アイス》クリームを一杯取って貰った。ところがいつもの爽《さわや》かさに引き更えて、咽喉《のど》を越すときいったん溶《と》けたものが、胃の中で再び固まったように妙に落ちつきが悪かった。それから二時間ほどして余は杉本さんの診察を受けたのである。

診察の結果として意外にもさほど悪くないと云う報告を得た時、平生森成さんから病気の質《たち》が面白くないと聞いていた雪鳥君は、喜びの余りすぐ社へ向けて好いという電報を打ってしまった。忘るべからざる八百グラムの吐血は、この吉報を逆襲すべく、診察後一時間後の暮方に、突如として起ったのである。

かく多量の血を一度に吐いた余は、その暮方の光景から、日のない真夜中を通して、明る日の天明に至る有様を巨細《こさい》残らず記憶している気でいた。程経《ほどへ》て妻《さい》の心覚《こころおぼえ》につけた日記を読んで見て、その中に、ノウヒンケツ（狼狽《ろうばい》した妻は脳貧血をかくのごとく書いている）を起し人事不省に陥《おちい》るとあるのに気がついた時、余は妻は枕辺《まくらべ》に呼んで、当時の模様を委《くわ》しく聞く事ができた。徹頭徹尾|明瞭《めいりょう》な意識を有して注射を受けたとのみ考えていた余は、実に三十分の長い間死んでいたのであった。

夕暮間近く、にわかに胸苦しいある物のために襲われた余は、悶《もだ》えたさの余りに、せつかく親切に床の傍《わき》に坐《すわ》っていてくれた妻に、暑苦しくていけないから、もう少しそっちへ退《ど》いてくれと邪慳《じゃけん》に命令した。それでも堪《た》えられなかったので、安静に身を横《よこた》うべき医師からの注意に背《そむ》いて、仰向《あおむけ》の位地《いち》から右を下に寝返ろうと試みた。余の記憶に上《のぼ》らない人事不省の状態は、寝ながら向《むき》を換えにかかったこの努力に伴う脳貧血の結果だと云う。

余はその時さっと迸《ほとば》しる血潮を、驚ろいて余に寄り添おうとした妻の浴衣《ゆかた》に、べっとり吐《は》きかけたそうである。雪鳥君は声を顫《ふる》わしながら、奥さんしっかりしなくてははいけませんと云

ったそうである。社へ電報をかけるのに、手が戦《わなな》いて字が書けなかったそうである。医師は追っかけ追っかけ注射を試みたそうである。後から森成さんにその数を聞いたら、十六 | 筒《とう》までは覚えていますと答えた。

[#ここから2字下げ]

淋漓絳血腹中文 [#「淋漓絳血腹中文」に白丸傍点]。 嘔照黄昏漾綺紋 [#「嘔照黄昏漾綺紋」に白丸傍点]

。 入夜空疑身是骨 [#「入夜空疑身是骨」に白丸傍点]。 臥牀如石夢寒雲 [#「臥牀如石夢寒雲」に白丸傍点]

[#ここで字下げ終わり]

十四

眼を開けて見ると、右向になったまま、瀬戸引《せとびき》の金盥《かなだらひ》の中に、べったり血を吐いていた。金盥が枕に近く押付けてあったので、血は鼻の先に鮮かに見えた。その色は今日《こんにち》までのように酸の作用を蒙《こうむ》った不明瞭《ふめいりょう》なものではなかった。白い底に大きな動物の肝《きも》のごとくどろりと固まっていたように思う。その時枕元で含嗽《うがい》を上げましょうという森成さんの声が聞えた。

余は黙って含嗽をした。そうして、つい今しがた傍《そば》にいる妻に、少しそっちへ退いてくれと云ったほどの煩悶《はんもん》が忽然《こつぜん》どこかへ消えてなくなった事を自覚した。余は何より先にまあよかったと思った。金盥に吐いたものが鮮血であろうと何であろうと、そんな事はいっこう気にかからなかった。日頃からの苦痛の塊《かたまり》を一度にどさりと打ちやり切ったという落ちつきをもって、枕元の人がざわざわする様子をほとんどよそごとのように見ていた。余は右の胸の上部に大きな針を刺されてそれから多量の食塩水を注射された。その時、食塩を注射されるくらいだから、多少危険な容体《ようだい》に逼《せま》っているのだろうとは思ったが、それもほとんど心配にはならなかった。ただ管《くだ》の先から水が洩《も》れて肩の方へ流れるのが厭《いや》であった。左右の腕にも注射を受けたような気がした。しかしそれは確然《はっきり》覚えていない。

妻《さい》が杉本さんに、これでも元のようになるでしょうかと聞く声が耳に入《い》った。さよう潰瘍《かいよう》ではこれまで随分多量の血を止《と》めた事もありますが……と云う杉本さんの返事が聞えた。すると床の上に釣るした電気灯がぐらぐらと動いた。硝子《ガラス》の中に彎曲《わんきょく》した一本の光が、線香煙花《せんこうはなび》のように疾《と》く閃《きら》めいた。余は生れてからこの時ほど強くまた恐ろしく光力を感じた事がなかった。その咄嗟《とっさ》の刹那《せつな》にすら、稲妻《いなずま》を眸《ひとみ》に焼きつけるとはこれだと思った。時に突然電気灯が消えて気が遠くなった。

カンフル、カンフルと云う杉本さんの声が聞えた。杉本さんは余の右の手頸《てくび》をしかと握っていた。カンフルは非常によく利《き》くね、注射し切らない内から、もう反響があると杉本さんがまた森成さんに云った。森成さんはええと答えたばかりで、別にはかばかしい返事はしなかった。それからすぐ電気灯に紙の蔽《おおい》をした。

傍《はた》がひとしきり静かになった。余の左右の手頸は二人の医師に絶えず握られていた。その二人は眼を閉じている余を中に挟《はさ》んで下《しも》のような話をした（その単語はことごとく独逸語《ドイツご》であった）。

「弱い」

「ええ」

「駄目だろう」

「ええ」

「子供に会わしたらどうだろう」

「そう」

今まで落ちついていた余はこの時急に心細くなった。どう考えても余は死にたくなかったからである。またけっして死ぬ必要のないほど、楽な気持ちでいたからである。医師が余を昏睡《こんすい》の状態にあるものと思い誤って、忌憚《きたん》なき話を続けているうちに、未練《みれん》な余は、瞑目《めいもく》不動の姿勢にありながら、半《なかば》無気味な夢に襲われていた。そのうち自分の生死に関する斯様《かよう》に大胆な批評を、第三者として床の上にじっと聞かせられるのが苦痛になって来た。しまいには多少腹が立った。徳義上もう少しは遠慮してもよさそうなものだと思った。ついに先がそう云う料簡《りょうけん》ならこっちにも考えがあるという気になった。人間が今死のうとしつつある間際《まぎわ》にも、まだこれほどに機略を弄《ろう》し得るものかと、回復期に向った時、余はしばしば当夜の反抗心を思い出しては微笑《ほほえ》んでいる。もっとも苦痛が全く取れて、安臥《あんが》の地位を平静に保っていた余には、充分それだけの余裕があったのであろう。

余は今まで閉じていた眼を急に開けた。そうしてできるだけ大きな声と明瞭《めいりょう》な調子で、私《わたし》は子供などに会いたくはありませんと云った。杉本さんは何事をも意に介せぬごとく、そうですかと軽く答えたのみであった。やがて食いかけた食事を済まして来るとか云って室《へや》を出て行った。それから左右の手を左右に開いて、その一つずつを森成さんと雪鳥君に握られたまま、三人とも無言のうちに天明に達した。

[# ここから2字下げ]

冷やかな脈を護《まも》りぬ夜明方《よあけがた》

[# ここで字下げ終わり]

十五

強《し》いて寝返《ねがえ》りを右に打とうとした余と、枕元の金盥《かなだらい》に鮮血を認めた余とは、一分《いちぶ》の隙《すき》もなく連続しているとのみ信じていた。その間には一本の髪毛《かみげ》を挟《はさ》む余地のないまでに、自覚が働いて来たとのみ心得ていた。ほど経《へ》て妻《さい》から、そうじゃありません、あの時三十分ばかりは死んでいらしたのですと聞いた折は全く驚いた。子供のとき悪戯《いたづら》をして気絶をした事は二度あるから、それから推測して、死とはおおかたこんなものだろうくらいにはかねて想像していたが、半時間の長き間、その経験を繰返しながら、少しも気がつかずに一カ月あまりを当然のごとくに過したかと思うと、はなはだ不思議な心持がする。実を云うとこの経験 第一経験と云い得るかが疑問である。普通の経験と経験の間に挟まって毫《ごう》もその連結を妨《さまた》げ得ないほど内容に乏しいこの余は何と云ってそれを形容していいかついに言葉に窮してしまう。余は眠から醒《さ》めたという自覚さえなかった。陰《かげ》から陽《ひ》に出たとも思わなかった。微《かす》かな羽音《はおと》、遠きに去る物の響、逃げて行く夢の匂《にお》い、古い記憶の影、消える印象の名残《なごり》 すべて人間の神秘を叙述すべき表現を数え尽してようやく髣髴《ほうふつ》すべき靈妙な境界《きょうがい》を通過したとは無論考えなかった。ただ胸苦《むなぐる》しくなって枕の上の頭を右に傾むけようとした次の瞬間に、赤い血を金盥の底に認めただけである。その間に入《い》り込《こ》んだ三十分の死は、時間から云っても、空間から云っても経験の記憶として全く余に取って存在しなかったと一般である。妻の説明を聞いた時余は死とはそれほどはかないものかと思った。そうして余の頭の上にしかく卒然と閃《きら》めいた生死二面の対照の、いかにも急劇でかつ没交渉なのに深く感じた。どう考えてもこの懸隔《かけへだ》った二つの現象に、同じ自分が支配されたとは納得できなかった。よし同じ自分が咄嗟《とっさ》の際に二つの世界を横断したにせよ、その二つの世界がいかなる関係を有するがために、余をしてたちまち甲から乙に飛び移るの自由を得せしめたかと考えると、茫然《ぼうぜん》として自失せざるを得なかった。

生死とは緩急《かんきゅう》、大小、寒暑と同じく、対照の連想からして、日常 | 一束《ひとたば》に使用される言葉である。よし輓近《ばんきん》の心理学者の唱うごとく、この二つのものもまた普通の対照と同じく同類連想の部に属すべきものと判ずるにしたところで、かく掌《てのひら》を翻《ひるが》えすと一般に、唐突《とうとつ》なるかけ離れた二 | 象面《フェーズ》が前後して我を擒《とりこ》にするならば、我はこのかけ離れた二象面を、どうして同性質のものとして、その関係を迹付《あとづ》ける事ができよう。

人が余に一個の柿を与えて、今日は半分喰え、明日《あす》は残りの半分の半分を喰え、その翌日《あくるひ》はまたその半分の半分を喰え、かくして毎日現に余れるものの半分ずつを喰えと云うならば、余は喰い出してから幾日目《いくかめ》かに、ついにこの命令に背《そむ》いて、残る全部をことごとく喰い尽すか、または半分に割る能力の極度に達したため、手を拱《こまぬ》いて空《むな》しく余《のこ》れる柿の一片《いっぺん》を見つめなければならない時機が来るだろう。もし想像の論理を許すならば、この条件の下《もと》に与えられた一個の柿は、生涯《しょうがい》喰っても喰い切れる訳がない。希臘《ギリシャ》の昔ゼノが足の疾《と》きアキリスと歩みの鈍《のろ》い亀との間に成立する競争に辞《ことば》を託して、いかなるアキリスもけっして亀に追いつく事はできないと説いたのは取も直さずこの消息である。わが生活の内容を構成《かたちづく》る個々の意識もまたかくのごとくに、日ごとか月ごとに、その半《なかば》ずつを失って、知らぬ間にいつか死に近づくなれば、いくら死に近づいても死ねないと云う非事実な論理に愚弄《ぐろう》されるかも知れないが、こう一足飛びに片方から片方に落ち込むような思索上の不調和を免《まぬ》かれて、生から死に行く径路《けいろ》を、何の不思議もなく最も自然に感じ得るだろう。俄然《がぜん》として死し、俄然として吾《われ》に還《かえ》るものは、否、吾に還ったのだと、人から云い聞かざるものは、ただ寒くなるばかりである。

[# ここから2字下げ]

縹緗玄黄外 [# 「縹緗玄黄外」に白丸傍点]。 死生交謝時 [# 「死生交謝時」に白丸傍点]。 寄託冥然去 [# 「寄託冥然去」に白丸傍点]。

我心何所之 [# 「我心何所之」に白丸傍点]。 归来覓命根 [# 「归来覓命根」に白丸傍点]。 杳 [# 「穴かんむりノ目」、第3水準1-89-50] 竟難知 [# 「杳 [# 「穴かんむりノ目」、第3水準1-89-50] 竟難知」に白丸傍点]。

孤愁空遶夢 [# 「孤愁空遶夢」に白丸傍点]。 宛動肅瑟悲 [# 「宛動肅瑟悲」に白丸傍点]。 江山秋已老 [# 「江山秋已老」に白丸傍点]。
粥葉 [# 「髟ノ丐」、第4水準2-93-21] 將衰 [# 「粥葉 [# 「髟ノ丐」、第4水準2-93-21] 將衰」に白丸傍点]。 廓寥天尚在 [# 「廓寥天尚在」に白丸傍点]。 高樹独余枝 [# 「高樹独余枝」に白丸傍点]。
晚懷如此澹 [# 「晚懷如此澹」に白丸傍点]。 風露入詩遲 [# 「風露入詩遲」に白丸傍点]。
[# ここで字下げ終わり]

十六

安らかな夜はしだいに明けた。室《へや》を包む影法師が床《とこ》を離れて遠退《とおの》くに従って、余はまた常のごとく枕辺《まくらべ》に寄る人々の顔を見る事ができた。その顔は常の顔であった。そうして余の心もまた常の心であった。病《やまい》のどこにあるかを知り得ぬほどに落ちついた身を床の上に横《よこた》えて、少しだに動く必要をもたぬ余に、死のなお近く徘徊《はいかい》していようとは全く思い設けぬところであった。眼を開けた時余は昨夕《ゆうべ》の騒ぎを（たとい忘れないまでも）ただ過去の夢のごとく遠くに眺めた。そうして死は明け渡る夜と共に立《た》ち退《の》いたのだらうぐらいの度胸でも据《すわ》ったものと見えて、何らの掛念《けねん》もない気分を、障子《しょうじ》から射し込む朝日の光に、心地《ここち》よく曝《さら》していた。実は無知な余を詐《いつ》わり終《おお》せた死は、いつの間にか余の血管に潜《もぐ》り込んで、乏《とも》しい血を追い廻しつつ流れていたのだそうである。「容体《ようだい》を聞くと、危険なれどごく安静にしていれば持ち直すかも知れぬ」とは、妻《さい》のこの日の朝の部に書き込んだ日記の一句である。余が夜明まで生きようとは、誰も期待していなかったのだとは後から聞いて始めて知った。

余は今でも白い金盥《かなだらひ》の底に吐き出された血の色と恰好《かっこう》とを、ありありとわが眼の前に思い浮べる事ができる。ましてその当分は寒天《かんてん》のように固まりかけた腥《なまぐさ》いものが常に眼先に散らついていた。そうして吾《わ》が想像に映る血の分量と、それに起因した衰弱とを比較しては、どうしてあれだけの出血が、こう劇《はげ》しく身体《からだ》に应《こた》えるのだらうといつても不審に堪《た》えなかった。人間は脈の中の血を半分失うと死に、三分の一失うと昏睡《こんすい》するものだと聞いて、それに吾《われ》とも知らず妻《さい》の肩に吐きかけた生血《なまち》の容積《かさ》を想像の天秤《てんびん》に盛って、命の向う側に重《おも》りとして付け加えた時ですら、余はこれほど無理な工面《くめん》をして生き延びたのだとは思えなかった。

杉本さんが東京へ帰るや否や、杉本さんはその朝すぐ東京へ帰った。もっとおりたいが忙がしいから失礼します、その代り手当は充分するつもりでありますと云って、新しい襟《えり》と襟飾《えりかざり》を着け易《か》えて、余の枕辺に坐ったとき、余は昨夕《ゆうべ》夜半《よなか》に、衾丈《ゆきたけ》の足りない宿の浴衣《ゆかた》を着たまま、そっと障子《しょうじ》を開けながら、どうかと一言《ひとこと》森成さんに余の様子を聞いていた彼人《かのひと》の様子を思い出した。余の記憶にはただそれだけしかとまらなかった杉本さんが、出がけに妻を顧みて、もう一遍吐血があれば、どうしても回復の見込はないものと御諦《おあき》らめなさなければいけませんと注意を与えたそうである。実は昨夕にもこの恐るべき再度の吐血が来そうなので、わざわざモルヒネまで注射してそれを防ぎ止めたのだとは、後《のち》になってその顛末《てんまつ》を審《つまび》らかにした余に取って、全く思いがけない報知であった。あれほど胸の中《うち》は落ちついていたものをと云いたいくらいに、余は平常《へいぜい》の心持で苦痛なくその夜を明したのである。話がつい外《そ》れてしまった。

杉本さんは東京へ帰るや否や、自分で電話を看護婦会へかけて、看護婦を二人すぐ余の出先へ送るように頼んでくれた。その時、早く行かんと間に合わないかも知れないからと電話口で急《せ》いたので、看護婦は汽車で走る途々《みちみち》も、もういけない頃ではなかろうかと、絶えず余の生命に疑いを挟《さしは》さんでいた。せっかく行っても、行き着いて見たら、遅過ぎて間に合わなかったと云うような事があってはつまらないと語り合ってきた。これも回復期に向いた頃、病牀《びょうしょう》の徒然《つれづれ》に看護婦と世間話をしたついでに、彼等の口からじかに聞いたたよりである。

かくすべての人に十の九まで見放された真中《まなか》に、何事も知らぬ余は、曠野《こうや》に捨てられた赤子《あかご》のごとく、ぽかんとしていた。苦痛なき生は余に向って何らの煩悶《はんもん》をも与えなかった。余は寝ながらただ苦痛なく生きておるという一事実を認めるだけであった。そうしてこの事実が、はからざる病《やまい》のために、周囲の人の丁重《ていちょう》な保護を受けて、健康な時に比べると、一步浮世の風の当《あた》り悪《にく》い安全な地に移って来たように感じた。実際余と余の妻とは、生存競争の辛《から》い空氣が、直《じか》に通わない山の底に住んでいたのである。

[# ここから2字下げ]

露けさの里にて静《しずか》なる病《やまい》

[# ここで字下げ終わり]

臆病者の特権として、余はかねてより妖怪《ようかい》に逢《あ》う資格があると思っていた。余の血の中には先祖の迷信が今でも多量に流れている。文明の肉が社会の鋭どき鞭《むち》の下《もと》に萎縮《いしゆく》するとき、余は常に幽霊を信じた。けれども虎烈刺《コレラ》を畏《おそ》れて虎烈刺に罹《かか》らぬ人のごとく、神に祈って神に棄《す》てられた子のごとく、余は今日《きょう》までこれと云う不思議な現象に遭遇する機会もなく過ぎた。それを残念と思うほどの好奇心もたまには起るが、平生はまず出逢《であ》わぬのを当然と心得てすまして来た。

自白すれば、八九年前アンドリュ・ラングの書いた「夢と幽霊」という書物を床の中に読んだ時は、鼻の先の灯火《ともしび》を一時に寒く眺めた。一年ほど前にも「霊妙なる心力」と云う標題に引かされてフランマリオンという人の書籍を、わざわざ外国から取り寄せた事があった。先頃はまたオリヴァー・ロッジの「死後の生」を読んだ。

死後の生！ 名からしてがすでに妙である。我々の個性が我々の死んだ後《のち》までも残る、活動する、機会があれば、地上の人と言葉を換《かわ》す。スピリチズムの研究をもって有名であったマイエルはたしかにこう信じていたらしい。そのマイエルに自己の著述を捧げたロッジも同じ考えのように思われる。ついこの間出たポドモアの遺著もおそらくは同系統のものだろう。

独乙《ドイツ》のフェヒナーは十九世紀の中頃すでに地球その物に意識の存すべき所以《ゆえん》を説いた。石と土と鉦《あらがね》に霊があると云うならば、有るとするを妨《さまた》げる自分ではない。しかしせめてこの仮定から出立して、地球の意識とは如何《いか》なる性質のものであらうぐらいの想像はあってしかるべきだと思う。

吾々の意識には敷居のような境界線があって、その線の下は暗く、その線の上は明らかであるとは現代の心理学者が一般に認識する議論のように見えるし、またわが経験に照らしても至極《しごく》と思われるが、肉体と共に活動する心的現象に斯様《かよう》の作用があったにしたところで、わが暗中の意識すなわちこれ死後の意識とは受取れない。

大いなるものは小さいものを含んで、その小さいものに気がついては、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己《おのれ》らの寄り集って拵《こし》らえている全部に対しては風馬牛《ふうばぎゅう》のごとく無頓着《むとんじゃく》であるとは、ゼームスが意識の内容を解き放したり、また結び合せたりして得た結論である。それと同じく、個人全体の意識もまたより大いなる意識の中《うち》に含まれながら、しかもその存在を自覚せずに、孤立するごとくに考えているのだろうとは、彼がこの類推《るいすい》より下《くだ》し来《きた》るスピリチズムに都合よき仮定である。

仮定は人々の随意であり、また時にとって研究上必要の活力でもある。しかしただ仮定だけでは、いかに臆病の結果幽霊を見ようとする、また迷信の極《きよく》不可思議を夢みんとする余も、信力をもって彼らの説を奉ずる事ができない。

物理学者は分子の容積を計算して蚕《かいこ》の卵にも及ばぬ（長さ高さともに一ミリメートルの）立方体に一千万を三乗した数が這入《はい》ると断言した。一千万を三乗した数とは一の下に零《れい》を二十一付けた莫大《ばくだい》なものである。想像を恣《ほしいま》まにする権利を有する吾々《われわれ》もこの一の下に二十一の零を付けた数を思い浮べるのは容易でない。

形而下《けいじか》の物質界にあってすら、相当の学者が綿密な手続を経て発表した数字上の結果すら、吾々はただ数理的の頭脳にのみもっともと首肯《うなず》くだけである。数量のあらましさえ応用の利かぬ心の現象に関しては云うまでもない。よし物理学者の分子に対するごとき明瞭《めいりょう》な知識が、吾人《ごじん》の内面生活を照らす機会が来たにしたところで、余の心はついに余の心である。自分に経験のできない限り、どんな綿密な学説でも吾を支配する能力は持ち得まい。

余は一度死んだ。そうして死んだ事実を、平生からの想像通りに経験した。はたして時間と空間を超越した。しかしその超越した事が何の能力をも意味しなかった。余は余の個性を失った。余の意識を失った。ただ失った事だけが明白なばかりである。どうして幽霊となれよう。どうして自分より大きな意識と冥合《めいごう》できよう。臆病にしてかつ迷信強き余は、ただこの不可思議を他人《ひと》に待つばかりである。

[# ここから2字下げ]

迎火《むかいび》を焚《た》いて誰《たれ》待つ紹《ろ》の羽織《はおり》

[# ここで字下げ終わり]

ただ驚ろかれたのは身体《からだ》の変化である。騒動のあった明《あく》る朝、何かの必要に促《うな》がされて、肋《あばら》の左右に横たえた手を、顔の所まで持って来《き》ようとすると、急に持主でも変わったように、自分の腕ながらまるで動かなかった。人を煩《わず》らわす手数《てかず》を厭《いと》って、無理に肘

《ひじ》を杖《つえ》として、手頸《てくび》から起しかけたはかけたが、わずか何寸かの距離を通して、宙に短い弧線を描く努力と時間とは容易のものでなかった。ようやく浮き上った筋《きん》の力を利用して、高い方へ引くだけの精気に乏しいので、途中から断念して、再び元の位置にわが腕を落そうとすると、それがまた安くは落ちなかった。無論そのままにして心を放せば、自然の重みでもとに倒れるだけの事ではあるが、その倒れる時の激動が、いかに全身に響き渡るかと考えると、非常に恐ろしくなっていて、ついに思い切る勇気が出なかった。余はおろす事も上げる事も、また半途中に支える事もできない腕を意識しつつそのやりどころに窮した。ようやく傍《はた》のものの気がついて、自分の手をわが手に添えて、無理のないように顔の所まで持って来てくれて、帰りにまた二つ腕をいっしょにしてやっと床《とこ》の上まで戻した時には、どうしてこう自己が空虚になったものか、我ながらほとんど想像がつかなかった。後から考えて見て、あれは全く護謨風船《ゴムふうせん》に穴が開《あ》いて、その穴から空気が一度に走り出したため、風船の皮がたちまちしゅっという音と共に収縮したと一般の吐血だから、それでああ身体《からだ》に込《こた》えたのだらうと判断した。それにしても風船はただ縮《ちぢ》まるだけである。不幸にして余の皮は血液のほかには大きな長い骨をたくさんに包んでいた。その骨が

余は生れてより以来この時ほど吾骨の硬さを自覚した事がない。その朝眼が覚《さ》めた時の第一の記憶は、実にわが全身に満ち渡る骨の痛みの声であった。そうしてその痛みが、宵《よい》に、酒を被《こうぶ》った勢《いきおい》で、多数を相手に劇《はげ》しい喧嘩《けんか》を挑《いど》んだ末、さんざんに打ち据《す》えられて、手も足も利《き》がなくなった時のごとくに吾を鈍《にぶ》く叩《たた》きこなしていた。砧《きぬた》に擣《う》たれた布は、こうもあろうかとまで考えた。それほど正体なくきめつけられ了《おわ》った状態を適当に形容するには、ぶちのめす〔#「ぶちのめす」に傍点〕と云う下等社会で用いる言葉が、ただ一つあるばかりである。少しでも身体を動かそうとすると、関節《ふしぶし》がみしみしと鳴った。

昨日《きのう》まで狭い布団《ふとん》に劃《かく》された余の天地は、急にまた狭くなった。その布団のうちの一部分よりほかに出る能力を失った今の余には、昨日《きのう》まで狭く感ぜられた布団がさらに大きく見えた。余の世界と接触する点は、ここに至ってただ肩と背中と細長く伸べた足の裏側に過ぎなくなった。頭は無論枕に着いていた。

これほどに切りつめられた世界に住む事すら、昨夕《ゆうべ》は許されそうに見えなかったのにと、傍《はた》のものは心の中《うち》で余のために観じてくれたらう。何事も弁《わきま》えぬ余にさえそれが憐《あわ》れであった。ただ身の布団に触れる所のみがわが世界であるだけに、そうしてその触れる所が少しも変わらないために、我と世界との関係は、非常に単純であった。全くスタチック（静《せい》）であった。したがって安全であった。綿《わた》を敷いた棺《かん》の中に長く寝て、われ棺を出でず、人棺を襲《おそ》わざる亡者《もうじゃ》の気分は、もし亡者に気分が有り得るならば、この時の余のそれと余りかけ隔《へだ》ってはいなかったらう。

しばらくすると、頭が麻痺《しび》れ始めた。腰の骨が骨だけになって板の上に載《の》せられているような気がした。足が重くなった。かくして社会的の危険から安全に保証された余――一人《いちにん》の狭い天地にもまた相応の苦しみができた。そうしてその苦痛を逃《のが》れるべく余は一寸《いっすん》のほかにさえ出る能力を持たなかった。枕元にどんな人がどうして坐《すわ》っているか、まるで気がつかなかった。余を看護するために、余の視線の届かぬ傍《かたわ》らを占めた人々の姿は、余に取って神のそれと一般であった。

余はこの安らかながら痛み多き小世界にじっと仰向《あおむけ》に寝たまま、身の及ばざるところに時々眼を走らした。そうして天井《てんじょう》から釣った長い氷嚢《ひょうのう》の糸をしばしば見つめた。その糸は冷たい袋と共に、胃の上でぴくりぴくりと鋭い脈を打っていた。

〔#ここから2字下げ〕

朝寒《あささむ》や生きたる骨を動かさず

〔#ここで字下げ終わり〕

十九

余はこの心持をどう形容すべきかに迷う。

力を商《あきな》いにする相撲《すもう》が、四つに組んで、かっきり合った時、土俵の真中に立つ彼等の姿は、存外静かに落ちついている。けれどもその腹は一分と経《た》たないうちに、恐るべき波を上下《じょうげ》に描かなければやまない。そうして熱そうな汗の球が幾条《いくすじ》となく背中を流れ出す。

最も安全に見える彼等の姿勢は、この波とこの汗の辛うじて膺《もた》らす努力の結果である。静かなのは相剋《あいこく》する血と骨の、わずかに平均を得た象徴である。これを互殺《ごさつ》の和《わ》という。二三十秒の現状を維持するに、彼等がどれほどの気魄《きはく》を消耗《しょうこう》せねばならぬかを思うとき、看《み》る人は始めて残酷の感を起すだろう。

自活の計《はかりごと》に追われる動物として、生を営む一点から見た人間は、まさにこの相撲のごとく苦しいものである。吾《われ》らは平和なる家庭の主人として、少くとも衣食の満足を、吾らと吾らの妻子《さいし

》とに与えんがために、この相撲に等しいほどの緊張に甘んじて、日々《にちにち》自己と世間との間に、互殺の平和を見出《みいだ》そうと力《つと》めつつある。戸外《そと》に出て笑うわが顔を鏡に映すならば、そうしてその笑いの中《うち》に殺伐《さつぱつ》の気に充《み》ちた我を見出すならば、さらにこの笑いに伴う恐ろしき腹の波と、背の汗を想像するならば、最後にわが必死の努力の、回向院《えこういん》のそのように、一分足《いっぽんた》らずで引分を期する望みもなく、命のあらん限は一生続かなければならないという苦しい事実¹に想《おも》い至るならば、我等は神経衰弱に陥《おちい》るべき極度に、わが精力を消耗するために、日に生き月に生きつつあるとまで言いたくなる。

かく単に自活自営の立場に立って見渡した世の中はことごとく敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社会は不正で人情のある敵である。もし彼对我の観を極端に引延ばすならば、朋友《ほうゆう》もある意味において敵であるし、妻子もある意味において敵である。そう思う自分さえ日に何度となく自分の敵になりつつある。疲れてもやめえぬ戦いを持続しながら、[# 「瑩 - 冏」、第4水準2-79-80] 然《けいぜん》として独《ひと》りその間に老ゆるものは、見惨《みじめ》と評するよりほかに評しようがない。

古臭い愚痴《ぐち》を繰返すなという声がしきりに聞えた。今でも聞える。それを聞き捨てにして、古臭い愚痴を繰返すのは、しみじみそう感じたからばかりではない、しみじみそう感じた心持を、急に病気が来て顛覆《くつがえ》したからである。

血を吐いた余は土俵の上に仆《たお》れた相撲と同じ事であった。自活のために戦う勇氣は無論、戦わねば死ぬという意識さえ持たなかった。余はただ仰向《あおむ》けに寝て、わずかな呼吸《いき》をあえてしながら、怖《こわ》い世間を遠くに見た。病気が床の周囲《ぐるり》を屏風《びょうぶ》のように取り巻いて、寒い心を暖かにした。

今までは手を打たなければ、わが下女さえ顔を出さなかった。人に頼まなければ用は弁じなかった。いくらしようと焦慮《あせ》っても、調《ととの》わない事が多かった。それが病気になると、がらりと変った。余は寝ていた。黙って寝ていただけである。すると医者²が来た。社員³が来た。妻《さい》が来た。しまいには看護婦⁴が二人来た。そうしてことごとく余の意志を働かさないうちに、ひとりでに来た。

「安心して療養せよ」と云う電報が満洲から、血を吐いた翌日に来た。思いがけない知己《ちき》や朋友⁵が代る枕元《まくらもと》に⁶来た。あるものは鹿児島から来た。あるものは山形から来た。またあるものは眼の前に逼《せま》る結婚を延期して来た。余はこれらの人に、どうして来た⁷と聞いた。彼等は皆新聞で余の病気を知って来た⁸と云った。仰向《あおむけ》に寝た余は、天井を見つめながら、世の人は皆自分より親切なものだと思った。住《す》み悪《にく》いとのみ観じた世界にたちまち暖かな風が吹いた。

四十を越した男、自然に淘汰《とうた》せられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に、忙《いそが》しい世が、これほどの手間と時間と親切をかけてくれようとは夢にも待設けなかった余は、病《やまい》に生き還《かえ》ると共に、心に生き還った。余は病に謝した。また余のためにこれほどの手間と時間と親切とを惜しまざる人々に謝した。そうして願わくは善良な人間になりたいと考えた。そうしてこの幸福な考えをわれに打壊《うちこわ》す者を、永久の敵とすべく心に誓った。

[# ここから2字下げ]

馬上青年老 [# 「馬上青年老」に白丸傍点]。 鏡中白髪新 [# 「鏡中白髪新」に白丸傍点]。

幸生天子国 [# 「幸生天子国」に白丸傍点]。 願作太平民 [# 「願作太平民」に白丸傍点]。

[# ここで字下げ終わり]

二十

ツルゲニエフ以上の芸術家として、有力なる方面の尊敬を新たにしつつあるドストイェフスキーには、人の知ることく、小供の時分から癲癇《てんかん》の発作《ほっさ》があった。われら日本人は癲癇と聞くと、ただ白い泡を連想するに過ぎないが、西洋では古くこれを神聖なる疾《やまい》と称《とな》えていた。この神聖なる疾に冒《お》かされる時、あるいはその少し前に、ドストイェフスキーは普通の人が大音楽を聞いて始めて到《いた》り得るような一種微妙の快感に支配されたそうである。それは自己と外界との円満に調和した境地で、ちょうど天体の端から、無限の空間に足を滑《すべ》らして落ちるような心持だとか聞いた。

「神聖なる疾」に罹《かか》った事のない余は、不幸にしてこの年になるまで、そう云う趣《おもむき》に一瞬間も捕われた記憶をもたない。ただ大吐血後五六日 経《た》つか経たないうちに、時々一種の精神状態に陥《おちい》った。それからは毎日のように同じ状態を繰返した。ついには来ぬ先にそれを予期するようになった。そうして自分とは縁の遠いドストイェフスキーの享《う》けたと云う不可解の歡喜をひそかに想像してみた。それを想像するか思い出すほどに、余の精神状態は尋常を飛び越えていたからである。ドクインセイの細《こま》かに書き残した驚くべき阿片《あへん》の世界も余の連想に上《のぼ》った。けれども読者の心目《しんもく》を眩惑《げんわく》するに足る妖麗《ようれい》な彼の叙述が、鈍《にぶ》い色をした卑しむべき原料から人工的に生れたのだと思うと、それを自分の精神状態に比較するのが急に厭《いや》になった。

余は当時十分と続けて人と話をする煩《わずら》わしさを感じた。声となって耳に響く空気の波が心に伝《つ

たわ》って、平らかな気分をことさらに騒《ざわ》つかせるように覚えた。口を閉じて黄金《こがね》なりという古い言葉を思い出して、ただ仰向《あおむ》けに寝ていた。ありがたい事に室《へや》の廂《ひさし》と、向うの三階の屋根の間に、青い空が見えた。その空が秋の露《つゆ》に洗われつつしだいに高くなる時節であった。余は黙ってこの空を見つめるのを日課のようにした。何事もない、また何物もないこの大空は、その静かな影を傾むけてことごとく余の心に映じた。そうして余の心にも何事もなかった。また何物もなかった。透明な二つのものがびたりと合った。合って自分に残るのは、縹緲《ひょうびょう》とでも形容してよい気分であった。

そのうち穏かな心の隅《すみ》が、いつか薄く暈《ぼか》されて、そこを照らす意識の色が微《かす》かになった。すると、ヴェイルに似た靄《もや》が軽く全面に向って万遍《まんべん》なく展《の》びて来た。そうして総体の意識がどこもかしこも稀薄《きはく》になった。それは普通の夢のように濃いものではなかった。尋常の自覚のように混雑したものでもなかった。またその中間に横《よこた》わる重い影でもなかった。魂が身体《からだ》を抜けると云ってはすでに語弊がある。霊が細《こま》かい神経の末端にまで行き亘《わた》って、泥でできた肉体の内部を、軽く清くすると共に、官能の実覚から杳《はる》かに遠からしめた状態であった。余は余の周囲に何事が起りつつあるかを自覚した。同時にその自覚が窈窕《ようちょう》として地の臭《におい》を帯びぬ一種特別のものであると云う事を知った。床《ゆか》の下に水が廻って、自然と畳が浮き出すように、余の心は己《おのれ》の宿る身体と共に、蒲団《ふとん》から浮き上がった。より適当に云えば、腰と肩と頭に触れる堅い蒲団がどこかへ行ってしまったのに、心と身体は元の位置に安く漂《ただよ》っていた。発作前《ほっさぜん》に起るドストイェフスキーの歓喜は、瞬刻のために十年もしくは終生の命を賭《と》しても然《しか》るべき性質のものとか聞いている。余のそれはさように強烈のものではなかった。むしろ恍惚《こうこつ》として幽《かす》かな趣《おもむき》を生活面の全部に軽くかつ深く印《いん》し去ったのみであった。したがって余にはドストイェフスキーの受けたような憂鬱性《ゆううつせい》の反動が来なかった。余は朝からしばしばこの状態に入《い》った。午過《ひるすぎ》にもよくこの蕩漾《とうよう》を味《あじわ》った。そうして覚《さ》めたときはいつでもその楽しい記憶を抱《いだ》いて幸福の記念としたくらいであった。

ドストイェフスキーの享《う》け得《え》た境界《きょうがい》は、生理上彼の病《やまい》のまさに至らんとする予言である。生を半《なかば》に薄めた余の興致は、単に貧血の結果であつたらしい。

[# ここから2字下げ]

仰臥人如唾 [# 「仰臥人如唾」に白丸傍点]。 默然見大空 [# 「默然見大空」に白丸傍点]。

大空雲不動 [# 「大空雲不動」に白丸傍点]。 終日杳相同 [# 「終日杳相同」に白丸傍点]。

[# ここで字下げ終わり]

二十一

同じドストイェフスキーもまた死の門口《かどぐち》まで引《ひ》き摺《ず》られながら、辛《かる》うじて後戻りをする事のできた幸福な人である。けれども彼の命を危《あや》めにかかった災《わざわい》は、余の場合におけるがごとき悪辣《あくらつ》な病気ではなかった。彼は人の手に作り上げられた法と云う器械の敵となつて、どんと心臓を打《う》ち貫《ぬ》かれようとしたのである。

彼は彼の倶楽部《クラブ》で時事を談じた。やむなくんばただ一揆《いっき》あるのみと叫んだ。そうして囚《とら》われた。八カ月の長い間 | 薄暗《うすくら》い獄舎の日光に浴したのち、彼は蒼空《あおぞら》の下《もと》に引き出されて、新たに刑壇の上に立った。彼は自己の宣告を受けるため、二十一度の霜《しも》に、襯衣《シャツ》一枚の裸姿《はだかすがた》となつて、申渡《もうしわたし》の終るのを待った。そうして銃殺に処すの一句を突然として鼓膜《こまく》に受けた。「本当に殺されるのか」とは、自分の耳を信用しかねた彼が、傍《かたわら》に立つ同囚《どうしゅう》に問うた言葉である。……白い手帛《ハンケチ》を合図に振った。兵士は覬《ねらい》を定めた銃口《つつぐち》を下に伏せた。ドストイェフスキーはかくして法律の捏《こ》ね丸めた熱い鉛《なまり》の丸《たま》を呑《の》まずにすんだのである。その代り四年の月日をサイベリヤの野に暮した。

彼の心は生から死に行き、死からまた生に戻って、一時間と経《た》たぬうちに三たび鋭い曲折を描いた。そうしてその三段落が三段落ともに、妥協を許さぬ強い角度で連結された。その変化だけでも驚くべき経験である。生きつつあると固く信ずるものが、突然これから五分のうちに死ななければならないと云う時、すでに死ぬときまってから、なお余る五分の命を提《ひっさ》げて、まさに来《きた》るべき死を迎えながら、四分、三分、二分と意識しつつ進む時、さらに突き当たった死が、たちまちとんぼ返りを打って、新たに生と名づけられる時、余のごとき神経質ではこの三 | 象面《フェーズ》の一つにすら堪《た》え得まいと思う。現にドストイェフスキーと運命を同じくした同囚の一人《いちにん》は、これがためにその場で気が狂ってしまった。

それにもかかわらず、回復期に向った余は、病牀《びょうしょう》の上に寝ながら、しばしばドストイェフスキーの事を考えた。ことに彼が死の宣告から蘇《よみが》えった最後の一幕を眼に浮べた。 寒い空、新しい刑壇、刑壇の上に立つ彼の姿、襯衣一枚のまま顫《ふる》えている彼の姿、 ことごとく鮮やかな想像の鏡に映った。独《ひと》り彼が死刑を免《まぬ》かれたと自覚し得た咄嗟《とっさ》の表情が、どうしても判然《

はっきり》映らなかった。しかも余はただこの咄嗟の表情が見たいばかりに、すべての画面を組み立てていたのである。

余は自然の手に罹《かか》って死のうとした。現に少しの間死んでいた。後から当時の記憶を呼び起した上、なおところどころの穴へ、妻《さい》から聞いた顛末《てんまつ》を埋《う》めて、始めて全くでき上る構図をふり返って見ると、いわゆる慄然《りつぜん》と云う感じに打たれなければやまなかった。その恐ろしさに比例して、九仞《きゅうじん》に失った命を一簣《いっき》に取り留める嬉《うれ》しさはまた特別であった。この死この生に伴う恐ろしさと嬉しさが紙の裏表のごとく重なったため、余は連想上常にドストイェフスキーを思い出したのである。

「もし最後の一節を欠いたなら、余はけっして正気ではいられなかったろう」と彼自身が物語っている。気が狂うほどの緊張を幸いに受けずとすんだ余には、彼の恐ろしさ嬉しさの程度を料《はか》り得ぬと云う方がむしろ適当かも知れぬ。それであればこそ、画竜点睛《がりゅうてんせい》とも云うべき肝心《かんじん》の刹那《せつな》の表情が、どう想像しても漠《ばく》として眼の前に描き出せないのだろう。運命の擒縦《きんしょう》を感じる点において、ドストイェフスキーと余とは、ほとんど詩と散文ほどの相違がある。

それにもかかわらず、余はしばしばドストイェフスキーを想像してやまなかった。そうして寒い空と、新らしい刑壇と、刑壇の上に立つ彼の姿と、襯衣《シャツ》一枚で顫《ふる》えている彼の姿とを、根気よく描き去り描き来《きた》ってやまなかった。

今はこの想像の鏡もいつとなく曇って来た。同時に、生き返ったわが嬉しさが日に日にわれを遠ざかって行く。あの嬉しさが始終《しじゅう》わが傍《かたわら》にあるならば、ドストイェフスキーは自己の幸福に対して、生涯《しょうがい》感謝する事を忘れぬ人であった。

二十二

余はうとうとしながらいつの間《ま》にか夢に入《い》った。すると鯉《こい》の跳《は》ねる音でたちまち眼が覚《さ》めた。

余が寝ている二階座敷の下はすぐ中庭の池で、中には鯉がたくさんに飼ってあった。その鯉が五分に一度ぐらいは必ず高い音を立ててばしゃりと水を打つ。昼のうちでも折々は耳に入った。夜はことに甚《はなはだ》しい。隣の部屋も、下の風呂場も、向うの三階も、裏の山もことごとく静まり返った真中《まなか》に、余は絶えずこの音で眼を覚ました。

犬の眠りと云う英語を知ったのはいつの昔か忘れてしまったが、犬の眠りと云う意味を実地に経験したのはこの頃が始めてであった。余は犬の眠りのために夜《よ》ごと悩まされた。ようやく寝ついてありがたいと思う間もなく、すぐ眼が開《あ》いて、まだ空は白まないだろうかと、幾度《いくたび》も暁《あかつき》を待《ま》ち佗《わ》びた。床《とこ》に縛《しば》りつけられた人の、しんとした夜半《よなか》に、ただ独《ひと》り生きている長さは存外な長さである。鯉が勢《いきおい》よく水を切った。自分の描いた波の上を叩《たた》く尾の音で、余は眼を覚ました。

室《へや》の中は夕暮よりもなお暗い光で照らされていた。天井から下がっている電気灯の珠《たま》は黒布《くろぬの》で隙間《すきま》なく掩《おい》がしてあった。弱い光りはこの黒布の目を洩《も》れて、微《かす》かに八畳の室を射た。そうしてこの薄暗い灯影《ひかげ》に、真白な着物を着た人間が二人|坐《すわ》っていた。二人とも口を利《き》かなかった。二人とも動かなかった。二人とも膝《ひざ》の上へ手を置いて、互いの肩を並べたままじっとしていた。

黒い布で包んだ球を見たとき、余は紗《しゃ》で金箔《きんぱく》を巻いた弔旗《ちょうき》の頭を思い出した。この喪章《もしょう》と関係のある球の中から出る光線によって、薄く照らされた白衣《はくい》の看護婦は、静かなる点において、行儀の好い点において、幽霊の雛《ひな》のように見えた。そうしてその雛は必要のあるたびに無言のまま必ず動いた。

余は声も出さなかった。呼びもしなかった。それでも余の寝ている位置に、少しの変化さえあれば彼等はきっと動いた。手を毛布《けっと》のうちで、もじつかせても、心持肩を右から左へ揺《ゆす》っても、頭は眼が覚《さ》めるたびに必ず麻痺《しび》れていた。あるいは麻痺れるので眼が覚めるのかも知れなかった。

その頭を枕の上で一寸《いっすん》摺《ず》らしても、あるいは足 足はよく寝覚《ねざ》めの種となった。平生《ふだん》の癖で時々、片方《かたかた》を片方の上へ重ねて、そのままとろとろとなると、下になった方の骨が沢庵石《たくわんいし》でも載せられたように、みしみしと痛んで眼が覚めた。そうして余は必ず強い痛さと重たさを忍んで足の位置を変えなければならなかった。これらのあらゆる場合に、わが変化に応じて、白い着物の動かない事はけっしてなかった。時にはわが動作を予期して、向うから動くと思われる場合もあった。時には手も足も頭も動かさないのに、眠りが尽きてふと眼を開けさえすれば、白い着物はすぐ顔の傍《そば》へ来た。余には白い着物を着ている女の心持が少しも分らなかった。けれども白い着物を着ている女は余の心を善《よ》く悟った。そうして影の形に随《したが》うごとくに変化した。響の物に應ずるごとくに働らいた。黒い布《ぬの》の目から洩《も》れる薄暗い光の下《もと》に、真白な着物を着た女が、わが肉体の先《せ

ん》を越して、ひそひそと、しかも規則正しく、わが心のままに動くのは恐ろしいものであった。

余はこの気味の悪い心持を抱いて、眼を開けると共に、ぼんやり眸《ひとみ》に映る室《へや》の天井を眺めた。そうして黒い布で包んだ電気灯の珠《たま》と、その黒い布の織目から洩れてくる光に照らされた白い着物を着た女を見た。見たか見ないうちに白い着物が動いて余に近づいて来た。

[#ここから2字下げ]

秋風鳴万木[#「秋風鳴万木」に白丸傍点]。 山雨撼高楼[#「山雨撼高楼」に白丸傍点]。

病骨稜如剣[#「病骨稜如剣」に白丸傍点]。 一灯青欲愁[#「一灯青欲愁」に白丸傍点]。

[#ここで字下げ終わり]

二十三

余は好意の干乾《ひから》びた社会に存在する自分をはなはだぎごちなく感じた。

人が自分に対して相応の義務を尽くしてくれるのは無論ありがたい。けれども義務とは仕事に忠実なる意味で、人間を相手に取った言葉でも何でも無い。したがって義務の結果に浴する自分は、ありがたいと思いながらも、義務を果たした先方に向って、感謝の念を起《おこ》し悪《にく》い。それが好意となると、相手の所作《しよさ》が一挙一動ことごとく自分を目的にして働いてくるので、活物《いきもの》の自分にその一挙一動がことごとく応《こた》える。そこに互を繋《つな》ぐ暖い糸があつて、器械的な世を頼母《たのも》しく思わせる。電車に乗って一区を瞬《またた》く間に走るよりも、人の背に負われて浅瀬を越した方が情《なさけ》が深い。

義務さえ素直《すなお》には尽くして呉れる人のない世の中に、また自分の義務さえ碌《ろく》に尽くしもしない世の中に、こんな贅沢《ぜいたく》を並べるのは過分である。そうとは知りながら余は好意の干乾《ひから》びた社会に存在する自分を切《せつ》にぎごちなく感じた。 或る人の書いたものの中に、余りせち辛《がら》い世間だから、自用车《じようしゃ》を節儉する格で、当分良心を質に入れたとあつたが、質に入れるのは固《もと》より一時の融通を計る便宜《べんぎ》に過ぎない。今の大多数は質に置くべき好意さえ天《てん》で持っているものが少なそうに見えた。いかに工面《くめん》がついても受出そうとは思えなかった。とは悟りながらやはり好意の干乾びた社会に存在する自分をぎごちなく感じた。

今の青年は、筆を執《と》っても、口を開《あ》いても、身を動かしても、ことごとく「自我の主張」を根本義にしている。それほど世の中は切りつめられたのである。それほど世の中は今の青年を虐待しているのである。「自我の主張」を正面から承《うけたまわ》れば、小憎《こにくら》しい申し分が多い。けれども彼等をしてこの「自我の主張」をあえてして憚《はば》かるところなきまでに押しつめたものは今の世間である。ことに今の経済事情である。「自我の主張」の裏には、首を縊《くく》ったり身を投げたりすると同程度に悲惨な煩悶《はんもん》が含まれている。ニーチェは弱い男であつた。多病な人であつた。また孤独な書生であつた。そうしてザラツストラはかくのごとく叫んだのである。

こうは解釈するようなものの、依然として余は常に好意の干乾びた社会に存在する自分をぎごちなく感じた。自分が人に向ってぎごちなくふるまいつつあるにもかかわらず、自《みづか》らぎごちなく感じた。そうして病《やまい》に罹《かか》った。そうして病の重い間、このぎごちなさをどこへか忘れた。

看護婦は五十グラムの粥《かゆ》をコップの中に入れて、それを鯛味噌《たいみそ》と混ぜ合わせて、一匙《ひとさじ》ずつ自分の口に運んでくれた。余は雀《すずめ》の子か鳥《からす》の子のような心持がした。医師は病の遠ざかるに連れて、ほとんど五日目ぐらいごとに、余のために食事の献立表《こんだてひょう》を作った。ある時は三通りも四通りも作って、それを比較して一番病人に好きそうなものを撰《えら》んで、あとはそれぎり反故《ほご》にした。

医師は職業である。看護婦も職業である。礼も取れば、報酬も受ける。ただで世話をしていない事はもちろんである。彼等をもって、単に金銭を得るが故《ゆえ》に、その義務に忠実なるのみと解釈すれば、まことに器械的で、実《み》も蓋《ふた》もない話である。けれども彼等の義務の中《うち》に、半分の好意を溶《と》き込《こ》んで、それを病人の眼から透《す》かして見たら、彼等の所作《しよさ》がどれほど尊《たっ》とくなるか分らない。病人は彼等のもたらす一点の好意によって、急に生きて来るからである。余は当時そう解釈して独《ひと》りで嬉《うれ》しかった。そう解釈された医師や看護婦も嬉しかろうと思う。

子供と違って大人《たいじん》は、なまじい一つの物を十筋《とすじ》二十筋の文《あや》からできたように見窮《みきわ》める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣《ほしい》ままに吸収する場合が極《きわ》めて少ない。本当に嬉しかった、本当にありがたかった、本当に尊《たつと》かったと、生涯《しょうがい》に何度思えるか、勘定《かんじょう》すれば幾何《いくばく》もない。たとい純潔でなくても、自分に活力を添えた当時のこの感情を、余はそのまま長く余の心臓の真中《まんなか》に保存したいと願っている。そうしてこの感情が遠からず単に一片《いっぺん》の記憶と変化してしまいそうなのを切《せつ》に恐れている。

好意の干乾《ひから》びた社会に存在する自分をはなはだぎごちなく感ずるからである。

[#ここから2字下げ]

天下自多事[#「天下自多事」に白丸傍点]。 被吹天下風[#「被吹天下風」に白丸傍点]。 高秋悲鬢白[

#「高秋悲鬢白」に白丸傍点】。

衰病夢顔紅【#「衰病夢顔紅」に白丸傍点】。 送鳥天無尽【#「送鳥天無尽」に白丸傍点】。 看雲道不窮【#「看雲道不窮」に白丸傍点】。

残存吾骨貴【#「残存吾骨貴」に白丸傍点】。 慎勿妄磨【#「」は「石+龍」、読みは「ろう」、638-7【#「慎勿妄磨【#「」は「石+龍」、読みは「ろう」、638-7】」に白丸傍点】。
【#ここで字下げ終わり】

二十四

小供のとき家に五六十幅の画《え》があった。ある時は床の間の前で、ある時は蔵の中で、またある時は虫干《むしぼし》の折に、余は交《かわ》る交それを見た。そうして懸物《かけもの》の前に独《ひと》り蹲踞《うづく》まって、黙然と時を過すのを楽《たのしみ》とした。今でも玩具箱《おもちゃばこ》を引繰《ひく》り返したように色彩の乱調な芝居を見るよりも、自分の気に入った画に対しての方が遥《はる》かに心持が好い。

画のうちでは彩色《さいしき》を使った南画《なんが》が一番面白かった。惜しい事に余の家の蔵幅《ぞうふく》にはその南画が少なかった。子供の事だから画の巧拙《こうせつ》などは無論分ろうはずはなかった。好《す》き嫌《きら》いと云ったところで、構図の上に自分の気に入った天然の色と形が表われていればそれで嬉《うれ》しかったのである。

鑑識上の修養を積む機会をもたなかった余の趣味は、その後別段に新らしい変化を受けないで生長した。したがって山水によって画を愛するの弊《へい》はあったろうが、名前によって画を論ずるの譏《そし》りも犯《おか》さずにすんだ。ちょうど画を前後して余の嗜好《しこう》に上《のぼ》った詩と同じく、いかな大家の筆になったものでも、いかに時代を食ったものでも、自分の気に入らないものはいっこう顧みる義理を感じなかった。（余は漢詩の内容を三分して、いたくその一分を愛すると共に、大いに他の一分をけなしている。残る三分の一に対しては、好むべきか悪《にく》むべきかいずれとも意見を有していない。）

ある時、青くて丸い山を向うに控えた、また的【#「白+轆のつくり」、第3水準1-88-69】《てきれき》と春に照る梅を庭に植えた、また柴門《さいもん》の真前《まんまえ》を流れる小河を、垣に沿って緩《ゆる》く繞《めぐ》らした、家を見て 無論 | 画絹《えぎぬ》の上に どうか生涯《しょうがい》に一遍で好いからこんな所に住んで見たいと、傍《そば》にいる友人に語った。友人は余の真面目《まじめ》な顔をしけじけ眺めて、君こんな所に住むと、どのくらい不便なものだか知っているかとさも気の毒そうに云った。この友人は岩手《いわて》のものであった。余はなるほど始めて自分の迂濶《うかつ》を愧《は》ずると共に、余の風流心に泥を塗った友人の実際的なのを悪んだ。

それは二十四五年も前の事であった。その二十四五年の間に、余もやむをえず岩手出身の友人のようにしだいに实际的になった。崖《がけ》を降りて溪川《たにがわ》へ水を汲《く》みに行くよりも、台所へ水道を引く方が好くなった。けれども南画に似た心持は時々夢を襲った。ことに病気になるって仰向《あおむけ》に寝てからは、絶えず美しい雲と空が胸に描かれた。

すると小宮君が歌麿《うたまろ》の錦絵《にしきえ》を葉書に刷《す》ったのを送ってくれた。余はその色合《いろあい》の長い間に自《おのず》と寂《さ》びたくすみ方に見惚《みと》れて、眼を放さずそれを眺めていたが、ふと裏を返すと、私はこの画の中にあるような人間に生れたいとか何とか、当時の自分の情調とは似ても似つかぬ事が書いてあったので、こんなやにっこい色男《いろおとこ》は大嫌《だいきらい》だ、おれは暖かな秋の色とその色の中から出る自然の香《か》が好きだと答えてくれと傍《はた》のものに頼んだ。ところが今度は小宮君が自身で枕元へ坐《すわ》って、自然も好いが人間の背景にある自然でなくっちゃとか何とか病人に向けて古臭い説を吐《は》きかけるので、余は小宮君を捕《つらま》えて御前は青二才《あおにさい》だと罵《のの》しった。それくらい病中の余は自然を懐《なつ》かしく思っていた。

空が空の底に沈み切ったように澄んだ。高い日が蒼《あお》い所を目の届くかぎり照らした。余はその射返《いかえ》しの大地に洽《あま》ねき内にしんと独《ひと》り温《ぬく》もった。そうして眼の前に群がる無数の赤蜻蛉《あかとんぼ》を見た。そうして日記に書いた。 「人よりも空、語《ご》よりも黙《もく》。...肩に来て人 | 懐《なつ》かしや赤蜻蛉《あかとんぼ》」

これは東京へ帰った以後の景色《けしき》である。東京へ帰ったあともしばらくは、絶えず美しい自然の画が、子供の時と同じように、余を支配していたのである。

【#ここから2字下げ】

秋露下南【#「石+（門<月）」、第3水準1-89-13】[#「秋露下南【#「石+（門<月）」、第3水準1-8-13】」に白丸傍点】。 黄花粲照顔【#「黄花粲照顔」に白丸傍点】。

欲行沿澗遠【#「欲行沿澗遠」に白丸傍点】。 却得与雲還【#「却得与雲還」に白丸傍点】。

【#ここで字下げ終わり】

子供が来たから見てやれと妻《さい》が耳の傍《そば》へ口を着けて云う。身体《からだ》を動かす力がないので余は元の姿勢のままただ視線だけをその方に移すと、子供は枕を去る六尺ほどの所に坐っていた。

余の寝ている八畳に付いた床の間は、余の足の方にあった。余の枕元は隣の間を仕切る襖《ふすま》で半《なかば》塞《ふさ》いであった。余は左右に開かれた襖《ふすま》の間から敷居越しに余の子供を見たのである。

頭の上の方にいるものを室《へや》を隔てて見る視力が、不自然な努力を要するためか、そこに坐っている子供の姿は存外遠方に見えた。無理な一瞥《いちべつ》の下《もと》に余の眸《ひとみ》に映った顔は、逢《お》うたと記《しる》すよりもむしろ眺めたと書く方が適当なくらい離れていた。余はこの一瞥よりほかにまた子供の影を見なかった。余の眸はすぐと自然の角度に復した。けれども余はこの一瞥の短きうちにすべてを見た。

子供は三人いた。十二から十《とお》、十から八つと順に列になって隣座敷の真中に並ばされていた。そうして三人ともに女であった。彼等は未来の健康のため、一夏《ひとなつ》を茅《ち》が崎《さき》に過すべく、父母《ふぼ》から命ぜられて、兄弟五人で昨日《きのう》まで海辺《うみべ》を駆《か》け廻っていたのである。父が危篤《きとく》の報知によって、親戚のものに伴《つ》れられて、わざわざ砂深い小松原を引き上げて、修善寺《しゅぜんじ》まで見舞に来たのである。

けれども危篤の何を意味しているかを知るには彼らはあまり小《ち》さ過《す》ぎた。彼らは死と云う名前を覚えていた。けれども死の恐ろしさと怖《こわ》さとは、彼らの若い額《ひたい》の奥に、いまだかつて影さえ宿さなかった。死に捕《とら》えられた父の身体が、これからどう変化するか彼らには想像ができなかった。父が死んだあとで自分らの運命にどんな結果が来るか、彼らには無論考え得られなかった。彼らはただ人に伴われて父の病氣を見舞うべく、父の旅先まで汽車に乗って来たのである。

彼らの顔にはこの会見が最後かも知れぬと云う愁《うれい》の表情がまるでなかった。彼らは親子の哀別以上に無邪気な顔をもっていた。そうしていろいろ人のいる中に、三人特別な席に並んで坐らせられて、厳肅な空気にじっと行儀よく取りすます窮屈を、切なく感じているらしく思われた。

余はただ一瞥《いちべつ》の努力に彼らを見ただけであった。そうして病《やまい》を解し得ぬ可憐な小さいものを、わざわざ遠くまで引張り出して、殊勝《しゅしょう》に枕元に坐らせておくのをかえって残酷に思った。妻《さい》を呼んで、せつかく来たものだから、そこいらを見物させてやれと命じた。もしその時の余に、あるいはこれが親子の見納めになるかも知れないと云う懸念《けねん》があったならば、余はもう少ししみじみ彼らの姿を見守ったかも知れなかった。しかし余は医師や傍《はた》のものが余に対して抱いていたような危険を余の病の上に自《みづか》ら感じていなかったのである。

子供はじきに東京へ帰った。一週間ほどしてから、彼らは各々《めいめい》に見舞状を書いて、それを一つ封に入れて、余の宿に届けた。十二になる筆子《ふでこ》のは、四角な字を入れた整わない候文《そうろうぶん》で、「御祖母様《おばさま》が雨がふっても風がふいても毎日毎日一日もかかさず御しゃか様へ御詣《おまいり》を遊ばず御百度《おひゃくど》をなされ御父様の御病氣一日も早く御全快を祈り遊ばされまた高田の御伯母《おんおば》様どこかの御宮へか御詣り遊ばすとのことに御座候《ござそうろう》ふさ、きよみ、むめの三人の連中は毎日猫の墓へ水をと리카え花を差し上げて早く御父様の全快を御祈りに居り候」とあった。十《とお》になる恒子《つねこ》のは尋常であった。八《やつ》になるえい子のは全く片仮名だけで書いてあった。字を埋《う》めて読みやすくすると、「御父様の御病氣はいかがでございますか、私は無事に暮しておりますから御安心なさいませ。御父様も私の事を思わずに御病氣を早く直して早く御帰りなさいませ。私は毎日休まずに学校へ行って居ります。また御母様によろしく」と云うのである。

余は日記の一頁《ページ》を寝ながら割《さ》いて、それに、留守の中《うち》はおとなしく御祖母様《おばさま》の云う事を聞かなくてはいけない、今についでであった時 | 修善寺《しゅぜんじ》の御土産《おみやげ》を届けてやるからと書いて、すぐ郵便で妻《さい》に出さした。子供は余が東京へ帰ってからも、平気で遊んでいる。修善寺の土産《みやげ》はもう壊してしまったろう。彼等が大きくなったとき父のこの文を読む機会がもしあったなら、彼等ははたしてどんな感じがするだろう。

[# ここから2字下げ]

傷心秋已到 [# 「傷心秋已到」に白丸傍点]。 嘔血骨猶存 [# 「嘔血骨猶存」に白丸傍点]。

病起期何日 [# 「病起期何日」に白丸傍点]。 夕陽還一村 [# 「夕陽還一村」に白丸傍点]。

[# ここで字下げ終わり]

五十グラムと云うと日本の二勺半にしか当たらない。ただそれだけの飲料で、この身体《からだ》を終日 | 持《も》ち応《こた》えていたかと思えば、自分ながら気の毒でもあるし、可愛《かわい》らしくもある。また馬鹿らしくもある。

余は五十グラムの葛湯《くずゆ》を恭《うやう》やしく飲んだ。そうして左右の腕に朝夕《あさゆう》二回ず

つの注射を受けた。腕は両方とも針の痕《あと》で埋《う》まっていた。医師は余に今日はどっちの腕にするかと聞いた。余はどっちにもしたくなかった。薬液を皿に溶いたり、それを注射器に吸い込ましたり、針を丁寧《ていねい》に拭《ぬぐ》ったり、針の先に泡のように細《こま》かい薬を吹かして眺めたりする注射の準備ははなはだ物奇麗《ものぎれい》で心持が好いけれども、その針を腕にぐさと刺して、そこへ無理に薬を注射するのは不愉快でたまらなかった。余は医師に全体その蔦色《とびいろ》の液は何だと聞いた。森成《もりなり》さんはブンベルンとかブンメルンとか答えて、遠慮なく余の腕を痛がらせた。

やがて日に二回の注射が一回に減じた。その一回もまたしばらくすると廃《や》めになった。そうして葛湯の分量が少しずつ増して来た。同時に口の中が執拗《しゅうね》く粘《ねば》り始めた。爽《さわや》かな飲料で絶えず舌と顎《あご》と咽喉《のど》を洗ってはいたたまれなかった。余は医師に氷を請求した。医師は固い片《かけ》らが滑《すべ》って胃の腑《ふ》に落ち込む危険を恐れた。余は天井《てんじょう》を眺めながら、腹膜炎を患《わず》らった廿歳《はたち》の昔を思い出した。その時は病気に障《さわ》るとかで、すべての飲物を禁ぜられていた。ただ冷水で含嗽《うがい》をするだけの自由を医師から得たので、余は一時間のうちに、何度となく含嗽をさせて貰った。そうしてそのつど人に知れないように、そっと含嗽の水を幾分かずつ胃の中に飲み下して、やっと熬《い》りつくような渴《かわき》を紛《まぎ》らしていた。

昔の計《はかりごと》を繰り返す勇気のなかった余は、口中《こうちゅう》を潤《うるお》すための氷を歯で嚙《か》み砕《くだ》いては、正直に残らず吐き出した。その代り日に数回 | 平野水《ひらのすい》を一口ずつ飲まして貰う事にした。平野水がくくんと音を立てるような勢で、食道から胃へ落ちて行く時の心持は痛快であった。けれども咽喉を通り越すや否やすぐとまた飲みたくなった。余は夜半《よなか》にしばしば看護婦から平野水を洋盃《コップ》に注《つ》いで貰って、それをありがたそうに飲んだ当時をよく記憶している。

渴《かつ》はしだいに歇《や》んだ。そうして渴よりも恐ろしい餓《ひも》じさが腹の中を荒して歩くようになった。余は寝ながら美しい食膳《しょくぜん》を何通《なんとお》りもなく想像で拵《こし》らえて、それを眼の前に並べて楽しんでた。そればかりではない、同じ献立《こんだて》を何人前も調《ととの》えておいて、多数の朋友にそれを想像で食わして喜こんだ。今考えると普通のものの嬉しがるような食物《くいもの》はちっともなかった。こう云う自分にすらあまりありがたくはない御膳《おぜん》ばかりを眼の前に浮べていたのである。

森成さんがもう葛湯《くずゆ》も厭《あ》きたろうと云って、わざわざ東京から米を取り寄せて重湯《おもゆ》を作ってくれた時は、重湯を生れて始めて啜《すす》る余には大いな期待があった。けれども一口飲んで始めてその不味《まず》いのに驚ろいた余は、それぎり重湯というものを近づけなかった。その代りカジノビスケットを一片《ひときれ》貰った折の嬉《うれ》しさはいまだに忘れられない。わざわざ看護婦を医師の室《へや》までやって、特に礼を述べたくらいである。

やがて粥《かゆ》を許された。その旨《うま》さはただの記憶となって冷やかに残っているだけだから実感としては今思い出せないが、こんな旨いものが世にあるかと疑いつつ舌を鳴らしたのは確かである。それからオートミールが来た。ソーダビスケットが来た。余はすべてをありがたく食った。そうして、より多く食いたいと云う事を日課のように繰り返して森成さんに訴えた。森成さんはしまいに余の病床に近づくのを恐れた。東君《ひがしくん》はわざわざ妻《さい》の所へ行って、先生はあんなもったもな顔をしている癖に、子供のように始終《しじゅう》食物《くいもの》の話ばかりしていておかしいと告げた。

[#ここから2字下げ]

腸《はらわた》に春 | 滴《したた》るや粥の味

[#ここで字下げ終わり]

二十七

オイッケンは精神生活と云う事を真向《まむき》に主張する学者である。学者の習慣として、自己の説を唱《とな》うる前には、あらゆる他のイズムを打破する必要を感じるものと見えて、彼は彼のいわゆる精神生活を新たならしむるため、その用意として、現代生活に影響を与うる在来からの処生上の主義に一も二もなく非難を加えた。自然主義もやられる、社会主義も叩《たた》かれる。すべての主義が彼の眼から見て存在の権利を失ったかのごとくに説き去られた時、彼は始めて精神生活の四字を拈出《ねんしゅつ》した。そうして精神生活の特色は自由である、自由であると連呼《れんこ》した。

試みに彼に向って自由なる精神生活とはどんな生活かと問えば、端的《たんてき》にこんなものだとはけっして答えない。ただ立派な言葉を秩序よく並べ立てる。むずかしそうな理窟《りくつ》を蜿蜒《えんえん》と幾重《いくえ》にも重ねて行く。そこに学者らしい手際《てぎわ》はあるかも知れないが、とぐろの中に巻き込まれる素人《しろうと》は茫然《ぼんやり》してしまっただけである。

しばらく哲学者の言葉を平民に解るように翻訳して見ると、オイッケンのいわゆる自由なる精神生活とは、こんなものではなからうか。我々は普通衣食のために働らいている。衣食のための仕事は消極的である。換言すると、自分の好悪《こうお》撰択を許さない強制的の苦しみを含んでいる。そう云う風にほかから圧《お》し

つけられた仕事では精神生活とは名づけられない。いやしくも精神的に生活しようと思うなら、義務なきところに向って自《みずか》ら進む積極のもでなければならない。束縛によらずして、己《おの》れ一個の意志で自由に営む生活でなければならない。こう解釈した時、誰も彼の精神生活を評してつまらないとは云うまい。コムトは倦怠《アンニユイ》をもって社会の進歩を促《うな》がす原因と見たくらいである。倦怠の極やむをえずして仕事を見つけ出すよりも、内に抑《おさ》えがたき或るものが蟠《わだか》まって、じっと持《も》ち応《こた》えられない活力を、自然の勢から生命の波動として描出《びょうしゅつ》し来《きた》る方が実際|実《み》の入《い》った生《い》き法《かた》と云わなければなるまい。舞踏でも音楽でも詩歌《しいか》でも、すべて芸術の価値はここに存していると評しても差支《さしつか》えない。

けれども学者オイッケンの頭の中で纏《まと》め上げた精神生活が、現に事実となって世の中に存在し得るや否やに至っては自《おのず》から別問題である。彼オイッケン自身が純一無雑に自由なる精神生活を送り得るや否やを想像して見ても分明《ぶんみょう》な話ではないか。間断なきこの種の生活に身を託せんとする前に、吾人は少なくとも早くすでに職業なき閑人として存在しなければならないはずである。

豆腐屋が気に向いた朝だけ石臼を回して、心の機《はず》まないときはけっして豆を挽《ひ》かなかったなら商賈《しょうばい》にはならない。さらに進んで、己《おの》れの好いた人だけに豆腐を売って、いけ好かない客をことごとく謝絶したらなおの事商賈にはならない。すべての職業が職業として成立するためには、店に公平の灯《ともし》を点《つ》けなければならない。公平と云う美しそうな徳義上の言葉を裏から言い直すと、器械的と云う醜い本体を有しているに過ぎない。一分《いっぶん》の遅速なく発着する汽車の生活と、いわゆる精神的生活とは、正に両極に位する性質のもでなければならない。そうして普通の人とは十が十までこの両端を七分三分《しちぶさんぶ》とか六分四分《ろくぶしぶ》とかに交《ま》ぜ合《あ》わして自己に便宜《べんぎ》なようにまた世間に都合の好いように（すなわち職業に忠実なるように）生活すべく天《てん》から余儀なくされている。これが常態である。たまたま芸術の好きなものが、好きな芸術を職業とするような場合ですら、その芸術が職業となる瞬間において、真の精神生活はすでに汚《けが》されてしまうのは当然である。芸術家としての彼は己《おの》れに篤《あつ》き作品を自然の気乗りで作り上げようとするに反して、職業家としての彼は評判のよきもの、売高《うれだか》の多いものを公《おおや》けにしなくてはならぬからである。

すでに個人の性格及び教育次第で融通の利《き》がなくなりそうなオイッケンのいわゆる自由なる精神生活は、現今の社会組織の上から見ても、これほど応用の範囲の狭いものになる。それを一般に行《ゆ》き亘《わた》って実行のできる大主義のごとくに説き去る彼は、学者の通弊として統一病に罹《かか》ったのだと酷評を加えてもよいが、たまたま文芸を好んで文芸を職業としながら、同時に職業としての文芸を忌《い》んでいる余のごときものの注意を呼び起して、その批評心を刺戟《しげき》する力は充分ある。大患に罹《かか》った余は、親の厄介になった子供の時以来久しぶりで始めてこの精神生活の光に浴した。けれどもそれはわずか一二カ月の中であった。病《やまい》が癒《なお》るに伴《つ》れ、自己がしだいに実世間に押し出されるに伴れ、こう云う議論を公けにして得意なオイッケンを羨《うら》やまずにはいられなくなって来た。

二十八

学校を出た当時小石川のある寺に下宿をしていた事がある。その和尚《おしょう》は内職に身の上判断をやるので、薄暗い玄關の次の間に、算木《さんぎ》と筮竹《ぜいちく》を見るのが常であった。固《もと》より看板をかけての公表《おもてむき》な商賈《しょうばい》でなかったせいか、占《うらない》を頼《たのみ》に来るものは多くて日に四五人、少ない時はまるで筮竹を揉《も》む音さえ聞えない夜もあった。易断《えきだん》に重きを置かない余は、固よりこの道において和尚と無縁の姿であったから、ただ折々|襖越《ふすまご》しに、和尚の、そりゃ当人の望み通りにした方が好うがすななど云う縁談に関する助言《じょごん》を耳に挟《さ》しは《さ》むくらいなもので、面と向き合っては互に何も語らずに久しく過ぎた。

ある時何かのついでに、話がつい人相とか方位とか云う和尚の縄張《なわば》り内に摺《ず》り込《こ》んだので、冗談半分|私《わたし》の未来はどうでしょうと聞いて見たら、和尚は眼を据《す》えて余の顔をじっと眺めた後《あと》で、大して悪い事ありませんと答えた。大して悪い事もないと云うのは、大して好い事もないと云ったも同然で、すなわち御前の運命は平凡だと宣告したようなものである。余は仕方がないから黙っていた。すると和尚が、あなたは親の死目には逢《あ》えませんかと云った。余はそうですかと答えた。すると今度はあなたは西へ西へと行く相があると云った。余はまたそうですかと答えた。最後に和尚は、早く顚《あご》の下へ髯《ひげ》を生やして、地面を買って居宅《うち》を御建てなさいと勧めた。余は地面を買って居宅を建て得る身分なら何も君の所に厄介になっちゃいまいと答えたかった。けれども顚の下と、地面|居宅《やしき》とはどんな関係があるか知りたかったので、それだけちょっと聞き返して見た。すると和尚は真面目《まじめ》な顔をして、あなたの顔を半分に割ると上の方が長くて、下の方が短か過ぎる。したがって落ちつかない。だから早く顚髯を生やして上下の釣合《つりあい》を取るようにすれば、顔の居坐《いすわ》りがよくなって動かなくなりますと答えた。余は余の顔の雑作《ぞうさく》に向って加えられたこの物理的もしくは美学的の批判が、優に余の未来の運命を支配するかのごとく容易に説き去った和尚を少しおかしく感じた。そうしてなるほ

どと答えた。

一年ならずして余は松山に行った。それからまた熊本に移った。熊本からまた倫敦《ロンドン》に向った。和尚の云った通り西へ西へと赴《おもむ》いたのである。余の母は余の十三四の時に死んだ。その時は同じ東京にありながら、つい臨終の席には侍《はんべ》らなかった。父の死んだ電報を東京から受け取ったのは、熊本にいる頃の事であった。これで見ると、親の死目に逢《あ》えないと云った和尚の言葉もどうかこうか中している。ただ願《あご》の髻《ひげ》に至ってはその時から今日《こんにち》に至るまで、寧日《ないじつ》なく剃《そ》り続けに剃っているから、地面と居宅《やしき》がはたして髻と共にわが手に入《い》るかどうかいまだに判然《はんぜん》せずにはいた。

ところが修善寺《しゅぜんじ》で病氣をして寝つくや否や、頬がざらざらし始めた。それが五六日すると一本一本に撮《つま》めるようになった。またしばらくすると、頬から願《あご》が隙間《すきま》なく隠れるようになった。和尚《おしょう》の助言《じょごん》は十七八年ぶりで始めて役に立ちそうな気色《けしき》に髻は延びて来た。妻《さい》はいっそ御生《おは》やしなすったら好いでしょうと云った。余も半分その気になって、しきりにその辺を撫《な》で廻していた。ところが幾日《いくか》となく洗いも櫛《くしけ》ずりもしない髪が、膏《あぶら》と垢《あか》で余の頭を埋《うず》め尽《つ》くそうとする汚苦《むさくる》しさに堪《た》えられなくなって、ある日床屋を呼んで、不十分ながら寝たまま頭に手を入れて顔に髪剃《かみそり》を当てた。その時地面と居宅の持主たるべき資格をまた奇麗《きれい》に失ってしまった。傍《はた》のものは若くなった若くなったと云ってしきりに囃《はや》し立てた。独《ひと》り妻だけはおやすっかり剃《す》っておしまいになったんですかと云って、少し残り惜しそうな顔をした。妻は夫の病氣が本復した上にも、なお地面と居宅が欲しかったのである。余といえども、髻を落さなければ地面と居宅がきっと手に入《い》ると保証されるならば、あの願はそのままに保存しておいたはずである。

その後《ご》髻は始終剃った。朝早く床の上に起き直って、向うの三階の屋根と吾室《わがへや》の障子《しょうじ》の間にわずかばかり見える山の頂《いただき》を眺めるたびに、わが頬の潔《いさぎ》よく剃り落してある滑《なめ》らかさを撫《な》で廻しては嬉《うれ》しがった。地面と居宅は当分断念したか、または老後の楽しみにあとあとまで取っておくつもりだったと見える。

[#ここから2字下げ]

客夢回時一鳥鳴 [#「客夢回時一鳥鳴」に白丸傍点]。 夜来山雨曉来晴 [#「夜来山雨曉来晴」に白丸傍点]

。

孤峯頂上孤松色 [#「孤峯頂上孤松色」に白丸傍点]。 早映紅暎鬱々明 [#「早映紅暎鬱々明」に白丸傍点]

。

[#ここで字下げ終わり]

二十九

修善寺《しゅぜんじ》が村の名で兼《かね》て寺の名であると言う事は、行かぬ前から疾《とく》に承知していた。しかしその寺で鐘の代りに太鼓を叩《たた》こうとはかつて想《おも》い至らなかった。それを始めて聞いたのはいつの頃であったか全く忘れてしまった。ただ今でも余が鼓膜の上に、想像の太鼓がどん　　どんと時々響く事がある。すると余は必ず去年の病氣を憶《おも》い出す。

余は去年の病氣と共に、新しい天井《てんじょう》と、新しい床《とこ》の間《ま》にかけた大島將軍の從軍の詩を憶い出す。そうしてその詩を朝から晩までに何遍となく読み返した当時を明らかに憶い出す。新しい天井と、新しい床の間と、新しい柱と、新らし過ぎて開閉《あけたて》の不自由な障子《しょうじ》は、今でも眼の前にありありと浮べる事ができるが、朝から晩までに何遍となく読み返した大島將軍の詩は、読んでは忘れ、読んでは忘れして、今では白壁《しらかべ》のように白い絹の上を、どこまでも同じ幅で走って、尾頭《おかしら》ともにぷつりと折れてしまう黒い線を認めるだけである。句に至っては、始めの剣戟《けんげき》という二字よりほか憶い出せない。

余は余の鼓膜《こまく》の上に、想像の太鼓がどん　　どんと響くたびに、すべてこれらのものを憶い出す。これらのものの中に、じっと仰向《あおむ》いて、尻の痛さを紛《まぎ》らしつつ、のつそつ夜明を待ち侘《わ》びたその當時を回顧すると、修禅寺《しゅぜんじ》の太鼓の音《ね》は、一種云うべからざる連想をもって、いつでも余の耳の底に卒然と鳴り渡る。

その太鼓は最も無風流な最も殺風景な音を出して、前後を切り捨てた上、中間だけを、自暴《やけ》に夜陰に向って擲《たた》きつけるように、ぶっきら棒な鳴り方をした。そうして、一つどんと素気《そっけ》なく鳴ると共にぱたりと留った。余は耳を峙《そば》だてた。一度静まった夜の空気は容易に動こうとはしなかった。やや久《しば》らくして、今のは錯覚ではなからうかと思ひ直す頃に、また一つどんと鳴った。そうして愛想《あいそ》のない音は、水に落ちた石のように、急に夜の中に消えたぎり、しんとした表に何の活動も伝えなかった。寝られない余は、待ち伏せをする兵士のごとく次の音《ね》の至るを思いつめて待った。その次の音はやはり容易には来なかった。ようやくのこと第一第二と同じく極《きわ》めて乾《から》び切《き》った響が　　響と

は云《い》い悪《にく》い。黒い空気の中に、突然無遠慮な点をどっと打って直《すぐ》筆を隠したような音が、余の耳朵《じだ》を叩《たた》いて去る後《あと》で、余はつくづくと夜を長いものに観じた。

もっとも夜は長くなる頃であった。暑さもしだいに過ぎて、雨の降る日はセルに羽織を重ねるか、思い切って朝から袷《あわせ》を着るかしなければ、肌寒《はださむ》を防ぐ便《たより》とならなかった時節である。山の端に落ち込む日は、常の短かい日よりもなおの事短かく昼を端折《はしお》って、灯《ひ》は容易に点《つ》いた。そうして夜《よ》は中々明けなかった。余はじりじりと昼に食い入る夜長を夜ごとに恐れた。眼が開《あ》くときっと夜であった。これから何時間ぐらいこうしてしんと夜の中に生きながら埋《うず》もっている事かと思うと、我ながらわが病気に堪《た》えられなかった。新しい天井と、新しい柱と、新しい障子を見つめるに堪えなかった。真白な絹に書いた大きな字の懸物《かけもの》には最も堪えなかった。ああ早く夜が明けてくれればいいのにと考えた。

修禅寺の太鼓はこの時にどんと鳴るのである。そうしてことさらに余を待ち遠しがらせるごとく疎《まば》らな間隔を取って、暗い夜をぼつりぼつりと縫い始める。それが五分と経《た》ち七分と経つうちに、しだいに調子づいて、ついに夕立の雨滴《あまだれ》よりも繁《しげ》く遍《せま》って来る変化は、余から云うともう日の出に間もないと云う報知であった。太鼓を打ち切ってしばらくの後《のち》に、看護婦がやっと起きて室《へや》の廊下の所だけ雨戸を開けてくれるのは何よりも嬉しかった。外はいつでも薄暗く見えた。

修善寺に行って、寺の太鼓を余ほど精密に研究したものはあるまい。その結果として余は今でも時々どんと云う余音《よいん》のないぶつ切ったような響を余の鼓膜の上に錯覚のごとく受ける。そうして一種云うべからざる心持を繰り返している。

[# ここから2字下げ]

夢繞星 [# 「さんずい+ (廣 - 廣)」、第3水準1-87-13] [# 「沙」の「少」に代えて「玄」、第3水準1-86-62] 露幽 [# 「夢繞星 [# 「さんずい+ (廣 - 廣)」、第3水準1-87-13] [# 「沙」の「少」に代えて「

」、第3水準1-86-62] 露幽」に白丸傍点]。 夜分形影暗灯愁 [# 「夜分形影暗灯愁」に白丸傍点]。 旗亭病近修禅寺 [# 「旗亭病近修禅寺」に白丸傍点]。 — [# 「木+晃」、第3水準1-85-91] 疎鐘已九秋 [# 「一 [# 「木+晃」、第3水準1-85-91] 疎鐘已九秋」に白丸傍点]。

[# ここで字下げ終わり]

三十

山を分けて谷一面の百合《ゆり》を飽《あ》くまで眺めようと心にきめた翌日《あくるひ》から床の上に仆《たお》れた。想像はその時限りなく咲き続く白い花を碁石《ごいし》のように点々と見た。それを小暗《おぐら》く包もうとする緑の奥には、重い香《か》が沈んで、風に揺られる折々を待つほどに、葉は息苦しく重なり合った。この間宿の客が山から取って来て瓶《へい》に挿《さ》した一輪の白さと大きさと香《かおり》から推して、余は有るまじき広々とした画《え》を頭の中に描いた。

聖書にある野の百合とは今云う唐菖蒲《からしょうぶ》の事だと、その唐菖蒲を床に活けておいた時、始めて芥舟君《かいしゅうくん》から教わって、それではまるで野の百合の感じが違ふようだがと話し合った一月前《ひとつきまえ》も思い出された。聖書と関係の薄い余にさえ、檜扇《ひおうぎ》を熱帯的に派出《はで》に仕立てたような唐菖蒲は、深い沈んだ趣《おもむき》を表わすにはあまり強過ぎるとしか思われなかった。唐菖蒲はどうでもよい。余が想像に描いた幽《かす》かな花は、一輪も見る機会のないうちに立秋に入《い》った。百合は露《つゆ》と共に摧《くだ》けた。

人は病むもののために裏の山に入《い》って、ここかしこから手の届く幾茎《いくくき》の草花を折って来た。裏の山は余の室《へや》から廊下伝いにすぐ上《のぼ》る便《たより》のあるくらい近かった。障子《しょうじ》さえ明けておけば、寝ながら縁側《えんがわ》と欄間《らんま》の間を埋《うず》める一部分を鼻の先に眺《なが》める事もできた。その一部分は岩と草と、岩の裾《すそ》を縫うて迂回《うかい》して上《のぼ》る小径《こみち》とから成り立っていた。余は余のために山に上《のぼ》るものの姿が、縁の高さを辞して欄間の高さに達するまでに、一遍影を隠して、また反対の位地から現われて、ついに余の視線のほかに没してしまうのを大いなる変化のごとくに眺めた。そうして同じ彼等の姿が再び欄間の上から曲折して下《くだ》って来るのを疎《うと》い眼で眺めた。彼らは必ず粗《あら》い縞《しま》の貸浴衣《かしゆかた》を着て、日の照る時は手拭《てぬぐい》で頬冠《ほおかむ》りをしていた。岨道《そばみち》を行くべきものとも思われぬその姿が、花を抱《かか》えて岩の傍《そば》にぬっと現われると、一種芝居にでも有りそうな感じを病人に与えるくらい釣合《つりあい》がおかしかった。

彼等の採《と》って来てくれるものは色彩の極《きわ》めて乏しい野生の秋草であった。

ある日しんとした真昼に、長い薄《すすき》が畳に伏さるように活けてあったら、いつどこから来たとも知れない蟋蟀《きりぎりす》がたった一つ、おとなしく中ほどに宿《とま》っていた。その時薄は虫の重みで撓《しな》いそうに見えた。そうして袋戸《ふくろど》に張った新しい銀の上に映る幾分か緑が、暈《ぼか》したように淡くかつ不分明《ふぶんみょう》に、眸《ひとみ》を誘うので、なおさら運動の感覚を刺激《しげき》し

た。

薄は大概すぐ縮《ちぢ》れた。比較的長く持つ女郎花《おみなえし》さえ眺めるにはあまり色素が足りなかった。ようやく秋草の淋《さみ》しさを物憂《ものう》く思い出した時、始めて蜀紅葵《しょっこうあおい》とか云う燃えるような赤い花卉《はなびら》を見た。留守居の婆さんに銭《ぜに》をやって、もっと折らせろと云ったら、銭は要《い》りません、花は預かり物だから上げられませんと断わったそうである。余はその話を聞いて、どんな所に花が咲いていて、どんな婆さんがどんな顔をして花の番をしているか、見たくてたまらなかった。蜀紅葵の花弁《はなびら》は燃えながら、翌日《あくるひ》散ってしまった。

桂川《かつらがわ》の岸伝いに行くといくらでも咲いていると云うコスモスも時々病室を照らした。コスモスはすべての中《うち》で最も単簡《たんかん》でかつ長く持った。余はその薄くて規則正しい花片と、空《くう》に浮んだように超然と取り合わぬ咲き具合とを見て、コスモスは干菓子《ひがし》に似ていると評した。なぜですかと聞いたものがあつた。範頼《のりより》の墓守《はかもり》の作つたと云う菊を分けて貰って来たのはそれからよほど後《のち》の事である。墓守は鉢に植えた菊を貸して上げようかと云ったそうである。この墓守の顔も見たかった。しまいには畠山《はたけやま》の城址《しろあと》からあけびと云うものを取って来て瓶《へい》に挿《はさ》んだ。それは色の褪《さ》めた茄子《なす》の色をしていた。そうしてその一つを鳥が啄《つつ》いて空洞《うつろ》にしていた。瓶に挿《さ》す草と花がしだいに変わるうちに気節はようやく深い秋に入《い》った。

[#ここから2字下げ]

日似三春永 [# 「日似三春永」に白丸傍点]。 心随野水空 [# 「心随野水空」に白丸傍点]。

牀頭花一片 [# 「牀頭花一片」に白丸傍点]。 閑落小眠中 [# 「閑落小眠中」に白丸傍点]。

[#ここで字下げ終わり]

三十一

若い時兄を二人失った。二人とも長い間 | 床《とこ》についていたから、死んだ時はいずれも苦しみ抜いた病《やまい》の影を肉の上に刻《きざ》んでいた。けれどもその長い間に延びた髪と髯《ひげ》は、死んだ後《あと》までも漆《うるし》のように黒くかつ濃かった。髪はそれほどでもないが、剃《そ》る事のできないで不本意らしく爺々汚《じじむさ》そうに生えた髯《ひげ》に至っては、見るから憐《あわ》れであった。余は一人の兄の太く逞《たくま》しい髯の色をいまだに記憶している。死ぬ頃の彼の顔がいかにも気の毒なくらい瘡《や》せ衰《おとろ》えて小《ちい》さく見えるのに引き易《か》えて、髯だけは健康な壮者を凌《しの》ぐ勢《いきおい》で延びて来た一種の対照を、気味悪くまた情《なさけ》なく感じたためでもあろう。

大患に罹《かか》って生か死かと騒がれる余に、幾日かの怪しき時間は、生とも死とも片づかぬ空裏《くうり》に過ぎた。存亡の領域がやや明かになった頃、まず吾《わが》存在を確めたいと云う願から、とりあえず鏡を取ってわが顔を照らして見た。すると何年か前に世を去った兄の面影《おもかげ》が、卒然として冷かな鏡の裏を掠《かす》めて去った。骨ばかり意地悪く高く残った頬、人間らしい暖味《あたたかみ》を失った蒼《あお》く黄色い皮、落ち込んで動く余裕のない眼、それから無遠慮に延びた髪と髯、 どう見ても兄の記念であった。

ただ兄の髪と髯が死ぬまで漆《うるし》のように黒かったのにかかわらず、余のそれらにはいつの間にか銀の筋が疎《まば》らに交っていた。考えて見ると兄は白髪《しらが》の生える前に死んだのである。死ぬとすればその方が屑《いさぎ》よいかも知れない。白髪に髯《びん》や頬をぼつぼつ冒されながら、まだ生き延びる工夫《くふう》に余念のない余は、今を盛りの年頃に容赦なく世を捨てて逝《ゆ》く壮者に比《くら》べると、何だかきまりが悪いほど未練らしかった。鏡に映るわが表情のうちには、無論はかないと云う心持もあったが、死《し》に損《そく》なつたと云う恥《はじ》も少しは交っていた。また「ヴァージニバス・ピュエリスク」の中に、人はいくら年を取っても、少年の時と同じような性情を失わないものだを書いてあったのを、なるほどと首肯《うなず》いて読んだ当時を憶《おも》い出して、ただその当時に立ち戻りたいような気もした。

「ヴァージニバス・ピュエリスク」の著者は、長い病苦に責められながらも、よくその快活の性情を終焉《しゅうえん》まで持ち続けたから、嘘《うそ》は云わない男である。けれども惜しい事に髪の毛の黒いうちに死んでしまった。もし彼が生きて六十七の高齢に達したら、あるいはこうは云い切れなかったろうと思えば、思われぬ事もない。自分が二十の時、三十の人を見れば大変に懸隔があるように思いながら、いつか三十が来ると、二十の昔と同じ気分な事が分ったり、わが三十の時、四十の人に接すると、非常な差違を認めながら、四十に達して三十の過去をふり返れば、依然として同じ性情に生きつつある自己を悟ったりするので、スチーヴンソンの言葉ももっともと受けて、今日《きょう》まで世を経《へ》たようなものの、外部から萌《きざ》して来る老類《ろうたい》の徴候を、幾茎《いくけい》かの白髪に認めて、健康の常時とは心意の趣《おもむき》を異《こと》にする病裡《びょうり》の鏡に臨んだ刹那《せつな》の感情には、若い影はさらに射《さ》さなかったからである。

白髪に強《し》いられて、思い切りよく老《おい》の敷居を跨《また》いでしまおうか、白髪を隠して、なお

若い街巷《ちまた》に徘徊《はいかい》しようか、そこまでは鏡を見た瞬間には考えなかった。また考える必要のないまでに、病める余は若い人々を遠くに見た。病気に罹《かか》る前、ある友人と会食したら、その友人が短かく刈《か》った余の揉上《もみあげ》を眺めて、そこから白髪に冒《おか》されるのを苦にしてだんだん上の方へ剃《す》り上《あ》げるのではないかと聞いた。その時の余にはこう聞かれるだけの色気は充分あった。けれども病《やまい》に罹《かか》った余は、白髪《しらが》を看板にして事をしたいくらいまでに諦《あきら》めよく落ちついてた。

病の癒《い》えた今日《こんにち》の余は、病中の余を引き延ばした心に活きているのだろうか、または友人と食卓についた病氣前《びょうきぜん》の若さに立ち戻っているだろうか。はたしてスチーヴンソンの云った通りを歩く気だろうか、または中年に死んだ彼の言葉を否定してようやく老境に進むつもりだろうか。白髪と人生の間に迷うものは若い人たちから見たらおかしいに違ない。けれども彼等若い人達にもやがて墓と浮世の間に立って去就を決しかねる時期が来るだろう。

[#ここから2字下げ]

桃花馬上少年時 [# 「桃花馬上少年時」に白丸傍点]。 笑抛銀鞍払柳枝 [# 「笑抛銀鞍払柳枝」に白丸傍点]

。 緑水至今迢遞去 [# 「緑水至今迢遞去」に白丸傍点]。 月明来照鬢如糸 [# 「月明来照鬢如糸」に白丸傍点]

。 [#ここで字下げ終わり]

三十二

初めはただ漠然《ばくぜん》と空を見て寝ていた。それからしばらくしていつ帰れるのだろうと思い出した。ある時はすぐにも帰りたいような心持がした。けれども床の上に起き直る気力すらないものが、どうして汽車に揺られて半日の遠きを行くに堪《た》え得ようかと考えると、帰りたいと念ずる自分がかなり馬鹿気て見えた。したがって傍《はた》のものに自分はいつ帰れるかと問《と》い糺《ただ》した事もなかった。同時に秋は幾度の昼夜を巻いて、わが心の前を過ぎた。空はしだいに高くかつ蒼《あお》くわが上を掩《おお》い始めた。

もう動かしても大事なかうと云う頃になって、東京から別に二人の医者を迎えてその意見を確めたら、今二週間の後《のち》にと云う挨拶《あいさつ》であった。挨拶があった翌日《あくるひ》から余は自分の寝ている地と、寝ている室《へや》を見捨るのが急に惜しくなった。約束の二週間がなるべくゆっくり廻転するようにと冀《ねが》った。かつて英国にいた頃、精一杯《せい いっぱい》英国を悪《にく》んだ事がある。それはハイネが英国を悪んだごとく因業《いんごう》に英国を悪んだのである。けれども立つ間際《まぎわ》になって、知らぬ人間の渦《うず》を巻いて流れている倫敦《ロンドン》の海を見渡したら、彼らを包む鶯色《とびいろ》の空気の奥に、余の呼吸に適する一種の瓦斯《ガス》が含まれているような気がし出した。余は空を仰いで町の真中《まなか》に佇《たた》ずんだ。二週間の後この地を去るべき今の余も、病む軀《からだ》を横《よこた》えて、床《とこ》の上に独《ひと》り佇ずまざるを得なかった。余は特に余のために造って貰った高さ一尺五寸ほどの偉大な藁蒲団《わらぶとん》に佇ずんだ。静かな庭の寂寞《せきばく》を破る鯉《こい》の水を切る音に佇ずんだ。朝露《あさつゆ》に濡《ぬ》れた屋根瓦《やねがわら》の上を遠近《おちこち》と尾を揺《うご》かし歩く鶺鴒《せきれい》に佇ずんだ。枕元の花瓶《かへい》にも佇ずんだ。廊下のすぐ下をちょろちょろと流れる水の音《ね》にも佇ずんだ。かくわが身を繞《めぐ》る多くのものに [# 「イ + 低のつくり」、第3水準1-84-31 n 廻《ていかい》しつつ、予定の通り二週間の過ぎ去るのを待った。

その二週間は待ち遠いはがゆさもなく、またあっけない不足もなく普通の二週間のごとくに来て、尋常の二週間のごとくに去った。そうして雨の濛々《もうもう》と降る暁を最後の記念として与えた。暗い空を透《す》かして、余は雨かと聞いたら、人は雨だと答えた。

人は余を運搬する目的をもって、一種妙なものを拵《こし》らえて、それを座敷の中《うち》に舁《か》き入《い》れた。長さは六尺もあつたらう、幅はわずか二尺に足りないくらい狭かった。その一部は畳を離れて一尺ほどの高さまで上に反《そ》り返《かえ》るように工夫してあつた。そうして全部を白い布《ぬの》で捲《ま》いた。余は抱かれて、この高く反った前方に背を託して、平たい方に足を長く横たえた時、これは葬式だと思った。生きたものに葬式と云う言葉は穏当でないが、この白い布で包んだ寝台《ねだい》とも寝棺《ねがん》とも片のつかないものの上に横になった人は、生きながら葬《とむら》われるとしか余には受け取れなかった。余は口の中で、第二の葬式と云う言葉をしきりに繰り返した。人の一度は必ずやって貰う葬式を、余だけはどうしても二 | 返《へん》執行しなければすまないと思ったからである。

舁《か》かれて室《へや》を出るときは平《たいら》であつたが、階子段《はしごだん》を降りる際《きわ》には、台が傾いて、急に輿《こし》から落ちそうになった。玄関に来ると同宿の浴客《よくかく》が大勢並んで、左右から白い輿を目送《もくそう》していた。いずれも葬式の時のように静かに控えていた。余の寝台はその間を通り抜けて、雨の降る庇《ひさし》の外に担《かつ》ぎ出された。外にも見物人はたくさんいた。やがて輿を豎《たて》に馬車の中に渡して、前後相対する席と席とで支えた。あらかじめ寸法を取って拵《こし》らえた

ので、輿はきっぱりと旨《うま》く馬車の中に納った。馬は降る中を動き出した。余は寝ながら幌《ほろ》を打つ雨の音を聞いた。そうして、御者台《ぎょしゃだい》と幌の間に見える窮屈な空間から、大きな岩や、松や、水の断片をありがたく拝した。竹藪《たけやぶ》の色、柿紅葉《かきもみじ》、芋《いも》の葉、槿垣《むくげがき》、熟した稲の香《か》、すべてを見るたびに、なるほど今はこんなものの有るべき季節であると、生れ返ったように憶《おも》い出しては嬉《うれ》しがった。さらに進んでわが帰るべき所には、いかなる新らしい天地が、寝ぼけた古い記憶を蘇生せしむるために展開すべく待ち構えているだろうかと想像して独《ひと》り楽しんだ。同時に昨日《きのう》まで [# 「イ + 低のつくり」、第3水準1-84-31] 徊《ていかい》した藁蒲団《わらぶとん》も鶺鴒《せきれい》も秋草も鯉《こい》も小河もことごとく消えてしまった。

[# ここから2字下げ]

万事休時一息回 [# 「万事休時一息回」に白丸傍点]。 余生豈忍比残灰 [# 「余生豈忍比残灰」に白丸傍点]

。

風過古澗秋声起 [# 「風過古澗秋声起」に白丸傍点]。 日落幽篁暝色来 [# 「日落幽篁暝色来」に白丸傍点]

。

漫道山中三月滞 [# 「漫道山中三月滞」に白丸傍点]。 [# 「言 + 巨」、第3水準1-92-4] 知門外一天開 [

「 [# 「言 + 巨」、第3水準1-92-4] 知門外一天開」に白丸傍点]。

帰期勿後黄花節 [# 「帰期勿後黄花節」に白丸傍点]。 恐有羈魂夢旧苔 [# 「恐有羈魂夢旧苔」に白丸傍点]

。

[# ここで字下げ終わり]

三十三

正月を病院でした経験は生涯《しょうがい》にたった一遍《いっぺん》しかない。

松飾りの影が眼先に散らつくほど暮が押しつまった頃、余は始めてこの珍らしい経験を目前に控えた自分を異様に考え出した。同時にその考《かんがえ》が単に頭だけに働いて、毫《ごう》も心臓の鼓動に響を伝えなかったのを不思議に思った。

余は白い寢床《ベッド》の上に寝ては、自分と病院と来《きた》るべき春とをかくのごとくいっしょに結びつける運命の酔興《すいきょう》さ加減を懇《ねんご》ろに商量《しょうりょう》した。けれども起き直って机に向ったり、膳《ぜん》に着いたりする折は、もうここが我家《わがいえ》だと言う気分心を任《まか》して少しも怪しまなかった。それで歳は暮れても春は逼《せま》っても別に感慨と云うほどのものは浮ばなかった。余はそれほど長く病院にいて、それほど親しく患者の生活に根をおろしたからである。

いよいよ大晦日《おおみそか》が来た時、余は小《ち》さい松を二本買って、それを自分の病室の入口に立てようかと思った。しかし松を支えるために釘《くぎ》を打ち込んで美しい柱に創《きず》をつけるのも悪いと思ってやめにした。看護婦が表へ出て梅でも買って参りましょうと云うから買って貰う事にした。

この看護婦は修善寺《しゅぜんじ》以来余が病院を出るまで半年《はんねん》の間 | 始終《しじゅう》余の傍《そば》に付き切りに附いていた女である。余はことさらに彼の本名を呼んで町井石子嬢《まちいいいしじょう》町井石子嬢と云っていた。時々間違えて苗字《みょうじ》と名前を顛倒《てんどう》して、石井町子嬢とも呼んだ。すると看護婦は首を傾《かし》げながらそう改めた方が好いようでございますねと云った。しまいには遠慮がなくなって、とうとう鼬《いたち》と云う渾名《あだな》をつけてやった。ある時何かのついでに、時に御前の顔は何かに似ているよと云ったら、どうせ碌《ろく》なものに似ているのじゃございませうと答えたので、およそ人間として何かに似ている以上は、まず動物にきまっている。ほかに似ようたって容易に似られる訳のものじゃないと言って聞かせると、そりゃ植物に似ちゃ大変ですと絶叫《ぜっきょう》して以来、とうとう鼬ときまってしまったのである。

鼬の町井さんはやがて紅白の梅を二枝 | 提《さ》げて帰って来た。白い方を蔵沢《ぞうたく》の竹の画《え》の前に挿《さ》して、紅《あか》い方は太い竹筒《たけづつ》の中に投げ込んだなり、袋戸《ふくろど》の上に置いた。この間人から貰った支那水仙もくるくると曲って延びた葉の間から、白い香《か》をしきりに放った。町井さんは、もうだいたい病気がよくおなりだから、明日《あした》はきっと御雑煮《おぞうに》が祝えるに違ないと云って余を慰めた。

除夜《じょや》の夢は例年の通り枕の上に落ちた。こう云う大患に罹《かか》ったあげく、病院の人となって幾つの月を重ねた末、雑煮までここで祝うのかと考えると、頭の中にはアイロニーと云う羅馬字《ローマじ》が明らかに綴《つづ》られて見える。それにもかかわらず、感に堪《た》えぬ趣《おもむき》は少しも胸を刺さずに、四十四年の春は自《おの》ずから南向の縁から明け放れた。そうして町井さんの予言の通り形《かた》ばかりとは云いながら、小《ち》さい一切《ひとときれ》の餅《もち》が元日らしく病人の眸《ひとみ》に映じた。余はこの一椀の雑煮に自家頭上を照らすある意義を認めながら、しかも何等の詩味をも感ぜずに、小さな餅の片《きれ》を平凡にかつ一口に、ぐいと食ってしまった。

二月の末になって、病室前の梅がちらほら咲き出す頃、余は医師の許《ゆるし》を得て、再び広い世界の人と

なった。ふり返って見ると、入院中に、余と運命の一角《いっかく》を同じくしながら、ついに広い世界を見る機会が来ないで亡《な》くなった人は少なくない。ある北国《ほっこく》の患者は入院以後病勢がしだいに募《つの》るので、附添《つきそい》の息子《むすこ》が心配して、大晦日《おおみそか》の夜《よ》になって、無理に郷里に連れて帰ったら、汽車がまだ先へ着かないうちに途中で死んでしまった。一間《ひとま》置いて隣りの人は自分で死期を自覚して、諦《あき》らめてしまえば死ぬと云う事は何でもないものだ云って、気の毒なほどおとなしい往生を遂げた。向うの外《はず》れにいた潰瘍患者《かいようかんじゃ》の高い咳嗽《せき》が日《ひ》ごとに薄らいで行くので、大方落ちついたのだらうと思って町井さんに尋ねて見ると、衰弱の結果いつの間にか死んでいた。そうかと思うと、癌《がん》で見込のない病人の癖に、から景気をつけて、回診の時に医師の顔を見るや否や、すぐ起き直って尻《しり》を捲《まく》るというのがあった。附添の女房を蹴《け》たり打《ぶ》ったりするので、女房が洗面所へ来て泣いているのを、看護婦が見兼《みかね》て慰めていましたと町井さんが話した事も覚えている。ある食道狭窄《しょくどうきょうさく》の患者は病院には這入《はい》っているようなものの迷いに迷い抜いて、灸点師《きゅうてんし》を連れて来て灸を据《す》えたり、海草《かいそう》を採《と》って来て煎《せん》じて飲んだりして、ひたすら不治の癌症《がんしょう》を癒《なお》そうとしていた。……

余はこれらの人と、一つ屋根の下に寝て、一つ賄《まかない》の給仕を受けて、同じく一つ春を迎えたのである。退院後一カ月 | 余《よ》の今日《こんにち》になって、過去を一攫《ひとつかみ》にして、眼の前に並べて見ると、アイロニーの一語はますます鮮やかに頭の中に拈出《ねんしゅつ》される。そうしていつの間にかこのアイロニーに一種の実感が伴って、両《ふた》つのものが互に纏綿《てんめん》して来た。鼯の町井さんも、梅の花も、支那水仙も、雑煮《ぞうに》も、あらゆる尋常の景趣はことごとく消えたのに、ただ当時の自分と今の自分との対照だけがはっきりと残るためだろうか。

底本：「夏目漱石全集7」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63年）年4月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年6月26日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。